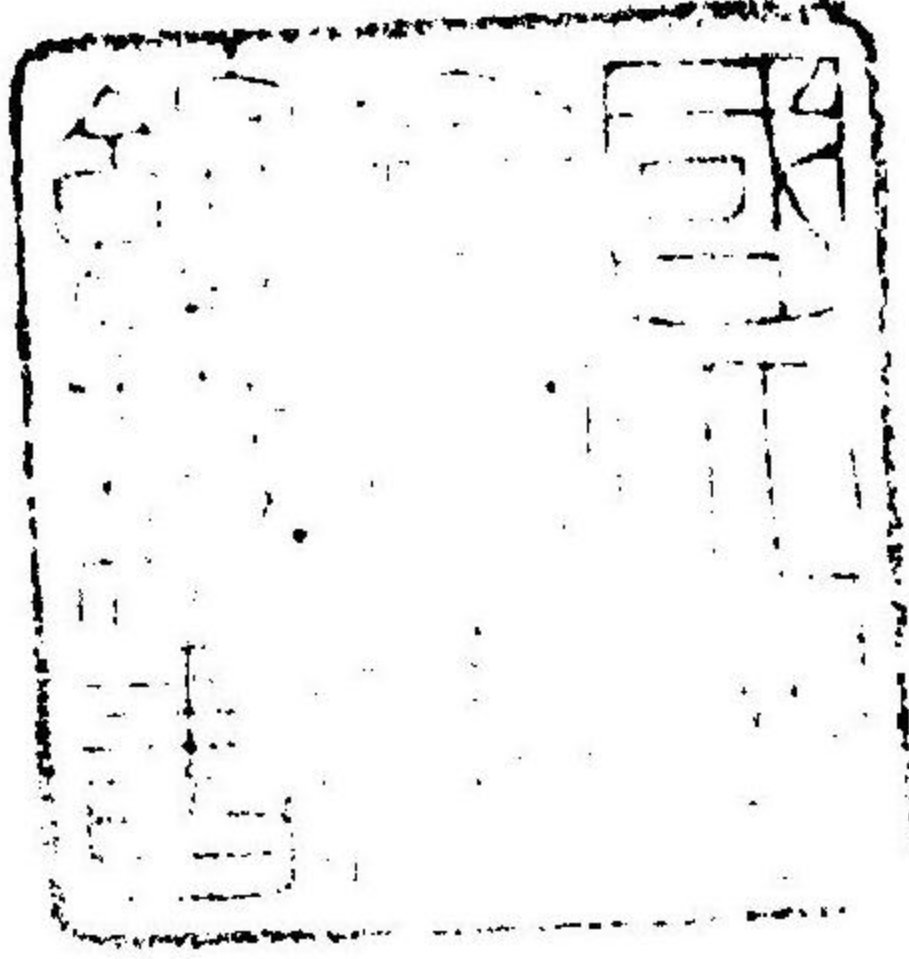


鹿兒島語法

818.99M919R

818.97
M919R



337355

緒言

今日の如く、百姓一揆然たる方言が各地に割據しては、國民の團結發展を沮害し、國家の體面を汚すの少からず。封建の代には、各藩語を異にすることが、藩民統治上、却て便利なりけんも、今は一統の大御代。曾て藩主に盡したる忠を、聖上陛下に捧ぐると同じく、曾て方言に傾けし愛は普通語に注ぎ、一日も早く方言を撲滅して、國語を統一せざるべからず。若し、猶ほ方言

を用ひて得々たる者あらば、そは實に國民の團結發展を沮害し、國家の體面を損する國賊なり。堂々鼓を鳴らして攻めて可なり。幸に、我が鹿兒島縣人は、近年、方言使用の非を覺り、教育界は勿論、一般有志も、普通語の普及に盡力しつつあれば、さすがの鹿兒島語も、年一年、特色を失ひ、百年を出でずして、痕跡なきに至らんとす。洵に喜ばしきことどもなり。

されど、マクスミューラー博士の曰へりし如く、嘗て何等の文學をも生まざりし方言蠻語も、言語問題の解決資料としては、ホーマーの詩、シセロの文に優ること、數等なり。方言を忌み、その消

滅を喜ぶ吾輩が、鹿兒島語法を編述せる所以、ここはあり。

さりながら、短才淺識なる上、鹿兒島語を聞くこと僅に四年、その研究に心を向けしより、二年に滿たず。而かも、繁務の餘にせざるなれば、玉を瓦にし、ホーマーの詩、シセロの文に劣る、千万級なるを恐る。但し、口頭のみを用ひらる方言の研究が、種種多量の文學記録を有する文語、普通語の研究に比して、一倍の困難あることには、讀者諸君の同情を請はざるを得ず。

語法編述に付ては、愚案あり。本書にも、その一部を適用せり。即ち、所謂代名詞を指詞と改めて、其範圍を廣めしこと、辭詞、即ち

形容詞に名詞形を設けたること、附屬的感動詞を不活助詞に編入せること、單語より接續詞を除けること、文章論に接續語孤立語を説けること等は、その主なるものなり。何故にかくせるかは、本書に説明せず。その便否は、讀者の判断に一任す。又、方言語法の説明は、一般語法のそれと異ならざるを得ざるものあり。單語論に於て、形式、内容の轉化相違に重きを置けるが如き、これなり。

例語の表記は、可成發音に一致せしめ、假名にて表記し難きは羅馬字を用ひたり。されど、文字は、言語の輪廓を描くに過ぎぬ

ものなれば、靈妙なる語音の、緩急、高低、強弱等、所謂言語の色彩を逸せること、いふまでもなし。こは、予の罪にあらずして、文字の罪なり。

参考書は、鹿兒島市大龍小學校調査の「鹿兒島語と普通語」、鹿兒島縣教育會編纂の「鹿兒島方言集」、國語調査委員會編纂の「音韻調査報告書」、音韻分布圖、「口語法調査報告書」、「口語法分布圖」、「東京語敬語法略表」などなり。

鹿兒島縣師範學校生徒諸君は、材料採集に多大の助力を與へられたり。又、鹿兒島新聞社は、昨年夏、貴重なる新紙の一部を割

きて、本書草案の一部を掲げ、識者の批正を仰ぐ機会を與へられたり。特に、ここに記して、感謝の意を表す。
卷末附録の薩摩狂句は、今夏、鹿兒島新聞に募集掲載せられしもの。同社に請うて撮録しぬ。

鹿兒城淨光妙寺畔の寓居にて

明治四十一年八月三十一日 著者 識す

鹿兒島語法目次

總論

單語論

第一章 名詞

- 第一節 音韻の轉化……………四
- 第二節 使用法の相違……………五
- 第三節 人倫の待遇……………九
- 第四節 助詞の融合……………一〇

第二章 指詞

- 第一節 普通指詞……………一一
- 第二節 特別指詞……………一二

◎目次

◎目次

第三章 靜詞

- 第一節 活用及其種類……………三三
- 第二節 語根の音韻轉化……………三八
- 第三節 使用法の相違……………三九

第四章 動詞

- 第一節 活用及其種類……………四一
- 第二節 語根の音韻轉化……………五三
- 第三節 使用法の相違……………五四
- 第四節 強勢動詞……………五六
- 第五節 動詞の性……………五八

第五章 副詞

- 第一節 音韻の轉化……………五九

- 第二節 使用法の相違……………六〇
- 第三節 音韻……………六一

第六章 助詞

- 第一節 活助詞……………六三
- 第二節 不活助詞……………七九

第七章 感詞

文章論

第一章 複合語及文

九八

第二章 文の成分

九九

- 第一節 主要成分……………九九
- 第二節 限定語……………一〇二

第三章 成分の位置

一〇四

◎目次

◎目次

第四章	成分の省略	一〇六
第五章	句	一〇九
第一節	獨立句	一〇九
第二節	附屬句	一一〇
第六章	附屬文	一一二
第七章	接續語	一一三
第八章	孤立語	一一六
附錄	薩摩狂句	一一八

鹿兒島語法目次終

鹿兒島語法

村林孫四郎著

總論

(一) 言語、思想交換の要具中、人の音聲に意味の宿れるものを、言語といふ。言語は、社會の約束的産物なるを以て、時と共に變遷し、所に依つて異なり。

(二) 國語と方言、一國民共有の言語を國語といひ、一部國にのみ通ずる言語を、方言といふ。方言成立の原因は、種々あれど、その最も大なるは、封建割據の政治なり。近年まで小藩分立せる我邦に方言多く、且つ、方言區域が、大体に於て、舊藩域に一致するは、こ

れがためなり。

(三)鹿兒島語、ここに鹿兒島語といふは、鹿兒島市を中心とする、舊薩藩語の意なり。素より、言語は男女・老幼・階級・職業・地方等によりて同じからざるものなれば、鹿兒島語といふも、決して一樣ならず。仔細に點檢する時は、百人百種の言語を見出し得べし。それど、とは小異にして、その間大同あり。但し、大島語は、別途の研究を要するを以て省さつ。

(四)語法、言語の構造を論ずるものを語法といふ。鹿兒島語法は、鹿兒島語の構造を論ずるものなり。人或は思はむ、方言訛語は、無紀律・不統一のものなりと。そは誤れり。訛るに、訛るの法則あり。誤りに、誤りの法則あり。

語法は、通例、二部より成る。單語論と文章論とこれなり。前者は解剖的にして、一語一語の構造を論じ、後者は総合的にして、文の組織を論ず。

(五)鹿兒島語の特色、長音の短音化せるもの、二音の一音となれるもの、音韻の脱落せるもの、促音撥音となれるもの多きこと、即ち、語の短縮緊張せるもの多きことは、恐らく、天下に比なけん。衣は肘に至り、袖腕に至るの薩摩隼人が、かかる語を有するは、頗る興味あることなり。又、鹿兒島語は、單純にして、今日の複雑精緻なる思想を表彰するに足らず。こは、土地偏在し、交通頻繁ならざる結果なり。

單 語 論

「オイ」「ガ」「ケ」「タ」「本」「ノ」「見」「チ」「シイ」「ヤイ」(僕が書いた本を見てくれ玉へ)の如き、一つ一つの詞を單語といふ。單語の数は多けれど、形態・性質の類同に依つて大別すれば、名詞・指詞・靜詞・動詞・副詞・助詞・感詞の七種となる。

第一章 名 詞

事物、及、その數量、序次の名たる詞を、名詞といふ。

本章に於ては、(一)音韻の轉化、(二)使用法の相違、(三)人倫の待遇、(四)助詞の融合の四方面より、名詞を觀察すべし。

第一節 音韻の轉化

もと、正しかりし語の、音韻轉化のために、方言の待遇を受くるに至れるもの、甚だ多し左にその主なるものを擧げん。

(一)長音の短音となれる例

カゲボシ(影法師)、サト(砂糖)、シヨウ(勝負)、シヨガ(生姜)、オドモン(横道者)、
ホリ(疱疹)、ソド(騒動)、ヨス(様子)、ドラク(道樂)、チロチン(提灯)、シヨジン(精

進、ジノ(上納)

(二)促音となれる例

オツサン(奥様)、イツサ(軍)、トツシイ(徳利)、ツツベ(釣瓶)、カヅ柿、オツシ(奥)、
タツサン(澤山)、ホツクイ(木履)、ヤツテ(八手)、トツ(時)、ロツセン(六錢)、オツ(帶)、
キツワケ(聞分)、タハツボン(黄盆)、

(三)撥音となれる例

エシグニ(縁組)、カンガタ(上方)、タタニ(疊)、イン犬、モノ(物)、カニ(紙)、マンノキ
(松樹)、ヒシネ(晝寝)、シマ(車)、クシナシ(山梔)、ナシ(浪)、ノシボイ(上り)、ヤシ
メ(病)、ヒシジニ(五十)、モシメン(木綿)、ベシ(紅)、タシニン(旅人)、カシナ(刀)、イ
シメ(一枚)、キシ不(狐)、フシマ(襖)、イシマ(合)、ミシナ(皆)、

(四) 母韻の省略例

ケコ(稽古)、キレ(奇麗)、スクッ(水瓜)、エゴ(笑顔)、エ(家)、テネ(丁寧)、セシシ
(泉水)、ミツチレ(水入)、ケト(鶏頭)、ケ(蕨)、フリ(篩)、テス(亭主)、ラギ(乱杭)、
ハッテ(羽二重)、メ(姪)、

母韻省略のために、撥音となりしものは、(三)にあげたり。

(五) 母韻の變換例

(1) 「アイ」が「エ」となれるもの

エサツ(挨拶)、エヅ(合圖)、エソ(愛想)、イヘ(位牌)、テ(鯛)、デテ(橙)、ニケ(二階)、セク(細工)、デコン(大根)、イツペ(一杯)、ヤッケ(厄介)、ケキ(甲斐絹)、シ
ネ(竹刀)、アンベ(塩梅)、ハ(蠅)、

(2) 「イ」が「エ」となれるもの

アサメ(薊)、イシカケ(石垣)、エベス(蕙美須)、メヤネ(目糞)、ムラサケ(紫)、
ワラベ(蕨)、ネセモン(似せ物)、

(3) 「エ」が「イ」となれるもの

オマイ(御前)、アブラギ(油揚)、ヒギ(髯)、ツイ(杖)、カシ(風)、
(4) 「オ」が「ウ」となれるもの

コツ(事)、ゴユ(御用)、ウカセ(大風)、ツロ(燈籠)、クヤ(紺屋)、ヒシブ(貧乏)、
メシブ(面目)、ユダレ(涎)、ツモリ(吃)、ツ(胴)、エシシ(焔筒)、イッシュ(一升)、
ザツ(坐頭)、シシブ(辛抱)、ツグツ(冬瓜)、ヒコタン(瓢箪)、アシノク(足甲)、
キ(今日)、ドヒ(土俵)、

- (5) 「ウ」が「オ」となれるもの
コモ_ソ (虚無僧)、モ_グラ (土籠)、ノ_ノ (布)、ヤ_ホ (藪)、ラ_ンポ (洋燈)、
- (6) 「イ」が「ウ」となれるもの
カ_ブ (微)、ス_ズメ_ケ (蜆貝)、フ_ク (蔭)、ス_メカ_ス (搾糟)、
- (7) 「オイ」が「エ」となれるもの
アマ_ケ (雨乞)、カ_メ (鴨居)、ヤ_テド (雇人)、テ_ノグ (手拭)、テ (麵)、ヘ_ロ (焙爐)、
イト_マゲ (暇乞)、
- (8) 「エ」の「イ」となれるもの
アイ (鮎)、イ_メシ (夕飯)、カ_イ (粥)、シ_ユイ (醬油)、フ_イ (冬)、

9) 「イ」が「エ」となれるもの

ユ_ナツ_ク (許嫁)、ユ_ワシ (鯨)、ユ_ワ (岩)、ユ_カダ (筏)、ユ_エ (祝)、

(10) その他の變換

イ_チ (魚)、ア_チモ_イ (泡盛)、ヤ_マメ (寡婦)、テ_イシ (砥石)、イ_シ (陞)、ニ_ヤ (庭)
 ビ_ヤ (枇杷)、ワ_ロ (野郎)、シ_ハヤ (芝居)、ヨ_ボシ (烏帽子)、モ_テ (元結)、エ_ツ (灸)
 メ_ヤク (迷惑)、

(六) 拗音と直音との變換例

(1) 拗音の直音となれるもの

ソ_ツ (燒酎)、ソ_チキ (正直)、ホ_ソ (奉書)、オ_トメ (御燈明)、ナ_ツセ_ン (借錢)、
 シ_ノ (收納)、ケ_ハン (脚脰)、コ_サク (小瘻)、ミ_ト (夫婦)、マ_ンツ (饅頭)、ツ_ツ (蝶)、
 プ_チホ (無調法)、

サア(様)、エン(膳)、オキイ(起火)、イイ(錐)、

(九) 父音と母韻の省略例

ガイシ(軽石)、キイシ(切石)、スズイシ(硯石)、シベ(癖)、スヨ(總領)、シヤク(柄杓)、
キクラ(木耳)、ソラ(空)、

(一〇) 父音の變換例

(1) R音のD音となれるもの

ダク(樂)、ダクツ(理屈)、エレダヨ(遠慮)、ツス(留守)、ドモ(老耄)、デニコン(蓮根)、
チコモン(利巧者)、デネン(來年)、デ(禮)、チキシン(琉球人)、チイヤ(料理屋)、
チッパ(立派)、ド(膽)、

稀には、「コロ」小供「ウシロー」運動の如く、「D」音の「R」音に轉化せるものあり。

(1) R音の省略されたるもの

エイ(襟)、ユイ(百合)、クスイ(藥)、コモイ(子守)、ムイ(無理)、ヒダイ(左)、
ヒヨイ(日和)、マツイ(祭)、キイ(桐)、錐(霧)

次の如く、「R」音の省略と同時に、母韻の變換せるものあり。

クイマ(車)、タイ(樽)、ホタイ(螢)、アヒイ(家鴨)、ヒイ(蛭)、アイドコイ(在所)、
ツヅイ(襪)、ハイ(春)、

(2) N音の省略されたるもの

ダゴ(團子)、ハゲ(半夏)、ニシン(人參)、クネブ(九年母)、カナ(鉋)、ヘシ(返事)、
カピヨ(看病)、タイ(谷)、ワラベ(童)、

(3) その他の省略

(2) 直音の拗音となれるもの

シヤクッソ(左官)、 コレニヤ(今夜)、 シヤククロ(柘榴)、 ショテツ(蘇鉄)、 スクワ(水瓜)、
クッシ(菓子)、 クッ(畫)、 テレグワ(煉瓦)、

今日の普通語には、「クッ」「グワ」なし。故に、之をも變換と見做せり。

(七) 清濁を誤れる例

(1) 清音の濁音となれるもの

ズナ(砂)、 クツ(靴)、 ナレデン(南天)、 ガネ(蟹)、 ガメ(龜)、

(2) 濁音の清音となれるもの

ドク(道具)、 ユシ(用事)、 ニシ(虹)、 ムキ(麥)、 ソチキ(正直)、

八) 父音の省略例

(2) R音のT音となれるもの

ウシト(後)、 ハシタ(柱)、 ムシト(蓆)、 シタメ(虱)、 シタゲ(白貝)、

(3) Z音がD音となれるもの

ヒゲ(膝)、 ツクシ(熟柿)、 チセカギ(自在鉤)、 シツ(葛)、 ミミツ(蚯蚓)、
アトシダイ(後退)、 チハン(襦袢)、

(4) D音がZ音となれるもの

ムカゼ(蜈蚣)、 クジラ(鯨)、 ナメクシ(蛞蝓)、 ヤケシヨ(火傷)、

(5) M音がB音となれるもの

ブチ(鞭)、 ヒボ(紐)、 セビ(蟬)、 ビナ(蜷)、 コブ(蜘蛛)、

(6) H音がF音となれるもの

◎ 單 語 論

フト(人)、フトツ(二つ)、フテ(額)、フク(奉公)、フツキ(漿酸)、

(7) F音のH音となれるもの

ヒロシキ(風呂敷)、ヒナ(鮒)、ヒタツ(二つ)、ヤネヒキ(屋根葺)、

(8) その他の變換

ソマ(蕎麥)、ニクミ(而炮)、ソゲ(刺)、オスケ(御汁)、ソロ(泥)、ヂツ(虹)、

カカ母、ヒ(忌)、アク(虻)、ネクト(根太)、シト(人)、ヨナフ(夜業)、ツ(甲)、

カタラモン(不具者)、ガラッパ(河童)、ウツバ(團扇)、クツバ(轡)、グノミ(鵜呑)、

グイ(瓜)、イチレン(一圓)、チロレキ(懲役)、カッポ(鯉)、カナボコ(蒲鋒)、

マメクシ(蛞蝓)、エド(餌)、モロダガン(百田紙)、アツガネ(輝)、

以上は、音韻轉化の主なるものなるが、その中、使用範圍廣く、且つ、語例に富むは、(一)

(二)(三)(四)、(五)の(1)(4)(7)、(六)、(八)の(1)、(一〇)の(1)なり。

第二節 使用法の相違

前節には、普通語が、音韻轉化のために方言となれるを擧げたるが、本節に於ては、(一)意義を轉用せるもの、(二)組立の異なるもの、(三)古語外國語音畫を用ふるもの、(四)系統不明のものを擧ぐべし。

(一) 意義を轉用せるもの

ドロ(泥) || 土、ホロ(幌) || 翼、オサ(箆) || 鯰、コシ(胡椒) || 唐辛、カクシ(石) || 茶山花、

ダンマ(馬) || 牝馬、ヤマイモ(山芋) || 醉狂者、イシタタキ(石) || 鶴鶴、ニセ(ニ) ||

若者、ニギイ(長) || 客齋坊、アカハラ(赤) || 赤痢、ホイ(布) || 神官、イトコ(從兄) || 親戚、

オドシ(威) || 案山子、スバ(鰐) || 唇、ミタテ(立) || 葬送、イキ(息) || 咳、ツラ(面) || 顔、

◎ 單 語 論

◎ 單語論

ハシイ(走)流し、ナヤ(屋)納 || 魚市場、チョコカ(土器)の轉 || 土瓶、ナレバ(毒) || 梅毒、ハラ(腹) || 裏足の、エ(家) || 巢蜘蛛の、ヤドカイ(借)宿木、デクワン(官)代 || 下男、ヤウチ(内)家 || 親戚、マワシ(廻)禪、ニゴシ(濁)白水、シチケ(氣)盤 || 肴、ヤンボ(藪) || 乱髪、ツ(甲) || 蓋(瘡)の、シクワ(皺)痘痕、ネバシ(延ば) || 眞綿、

(二) 組立の異なるもの

オトコイン(犬)男 || 牡犬、オナゴイン(犬)女 || 牝犬、タカメ(高) || 目高、ハンノコ(梯)の子 || 梯子、ユヌス(子) || 柚子、ツッノハ(葉)の || 樑、ノトコ(床)苗 || 苗代、ユッキヤメ(雨) || 霰、シモガネ(金)霜 || 氷、ヤマヒビキ(山)響 || 山彦、オセ(背)大 || 大人、エツガネ(鐵) || 伊勢蝦、イトグイ(瓜) || 糸瓜、イガワ(河)井 || 井戸、ウツヒイ(うそ) || 嘘つき、トイザカナ(肴)取 || 口取、アラレモン(ぬち) || 外の物、ヒノイチチチ(日の) || 終日、ヨノヨシテ(夜の夜) || 終夜、

ケスキアワセ(毛抜)合 || 出合頭、ゴシトツ(合) || 二合五勺、ゴミツツ(合) || 七合五勺、ヒシテ(山) || 一日、アレシメドコイ(洗ひ仕)舞 || 臺所、カナビンダレ(金盞) || 金盞、ダンガサ(傘) || 蝙蝠傘、ダイヤマ(疲れ)休 || 晚酌、イツガネ(指) || 指輪、ヒスキ(火)抄 || 十能、ウチカタ(内) || 妻、オメ(女)御 || 女房、テンドコ(天)道 || 私生兒、オカタ(方)御 || 妻君、ヨメシ(嫁)御 || お嫁、サマジヨ(嫁)御 || 情夫、トノシヨ(殿)御 || 夫、コシユサア(小主) || 奥さん、コユサア(同上)、

(三) 古語・外國語・音書を用ふるもの

ナエ(古語「な」の轉) || 地震、アケス(古語「あき」の訛) || 蜻蛉、サネ(古語) || 寶、コツテウシ(古語「こどひ」の轉) || 強き牡牛、ハコ(古語) || 糞、アマシヤクメ(古語「天」の轉) || 拗け女、チゴ(古語) || 少年、オシキ(古語「折」の轉) || 膳、キザイ(古語「きざい」の轉) || 階段、ヨキ(古語) || 斧、イカモン(古語「殿」の轉) ||

◎ 單語論

◎ 單 語 論

荒物、ホゲ(古語「げ」の轉)穴、ハザ(古語)間、アレ(古語)餅の取粉、フゲシヤ(古語「分限者」)
 財産家、バンコ(外國語)腰掛、ドンタク(外國語)休日、ドロ(音)唾、ブク(音)泡
 ギツタ(音)どび、アバ(音)啞、モゴ(同上)、ハチく毛(音)まつ毛、ドレヂ(音)
 地固、ガラレツ(音)干物、

(四) 系統不明のもの

アマメ油虫、アマシ酢、オコ味噌、サガ赤痢、トボシ赤米、ダザ狸、
 ホイ蜻蛉、ダンチュ金魚、ダクマ河鰈、ダンナ禪、オッカ借金、ガゴ妖怪、
 ボブラ南瓜、メッキ吠、ゲケ風邪、ギメ蟋蟀、ワクト蝦蟇、シユケ箆、
 ~ゴ裏白、ゴゼ蛙、サダチ夕立、グン黥、サコシタロ唐臼、フツ蓬、
 アラケ郊外、ヨモ猿、ノスカイ醜業婦、ナラシ掛竿、ホキ谷、

イイ労働交換、トニコ蛙、ハギ食物講、モレシ鳶、ワンギ夫婦別れ、

第三節 人倫の待遇

(一) 人倫に對し、敬意をあらはすには、次の如く呼ぶ。

オトツァン(お父様)、トツァン(父様)、オッカハン(お母様)、オッカ(母様)、
 オササア(祖父様)、オハッサン(祖母様)、アンサン(兄様)、アンニヤン(姉様)、
 ヨメシ(嫁御)、アンシ(姉御)、イモッチ(妹御)、トノシ(殿御)、オゴイサア(お嬢さん)
 ん、チゴサア(坊ちゃん)、コジュサア(奥様)、セゴドン(西郷殿)、ダンナサア(旦那様)、
 ダアハア(同上)、

(二) 卑蔑の意をあらはすには、

ネフセゴロ(寝坊)、フユシゴロ(無性者)、ヤッセンボ(卑怯者)、エクレボ(酔ひどれ)、

オロイハチ(おはれ者)、アマエハツナ(甘え坊)、クッサレオンギ(魔爺)、カカリロ(噂奴)
などと呼ぶ。

第四節 助詞の融合

助詞「ニ」は、名詞に融合す。左に、その法則をあぐ。

(一)「ニ」語末「イ」韻の語に接する時は、融合して、(A)又は(YA)となる。時ワ(TOKIWA)ニトカ(TOKA)、時ワ(TOKIWA)ニキヤ(TOKYA)。

又、語末「ウ」韻の語に接する時は、融合して(WA)、又は、(A)となる。

細工ワ(SEKUNA)ニセキ(SEKI)、細工ワ(SEKUNA)ニセカ(SEKA)。

語末「オ」韻の語に接する時は、融合して(A)となる。

子供ワ(KODONWA)ニコトイ(KODONIA)。

(二)「イ」語末「ア」韻の語に附く時は、融合して(E)となる。

山イ(YAMAI)ニヤマ(YAME)、寺イ(TERA)ニテラ(TERE)。

これが、語末「ウ」韻の語に附く時は、融合して(I)となる。

細工イ(SEKI)ニセキ(SEKI)、亭主イ(TESU)ニテシ(TESI)。

又、語末「オ」韻の語に附く時は、融合して(E)となる。

子供イ(KODONOI)ニコトイ(KODONIE)。

(三)「イ」語末「イ」韻の語に接する時は、融合して、(YO)、又は、(YU)となる。

飯ヲ(MESUWO)ニメシ(MESYO)、飯ヲ(MESUWO)ニメシユ(MESYU)。

第二章 指 詞

◎ 單 語 論

事物、又は、數量・容態等を指示する詞を、指詞といふ。これを大別して、普通指詞と特別指詞の二種とす。

第一節 普通指詞

こは、一切の事物を指示する詞にて、指者と所指者との距離の遠近により、四稱に分る。最近者を指すを近稱、遠者を指すを遠稱、遠近の中を指すを中稱、所指者の不定なるを不定稱といふ。而して、各稱、新古の二形あり。古形は、全く普通語のそれに同じ。

新形	古形	形稱
コイ	コ	近稱
ソイ	ソ	中稱
アイ、*カイ	ア カ	遠稱
ドイ、ナナイ	ド ナ	不定稱

◎ 單 語 論

新形の「コイ」・「ソイ」・「アイ」・「カイ」・「ドイ」は、普通語「コレ」・「ソレ」・「アレ」・「カレ」・「ドレ」の「R」音脱落と同時に、母韻轉化せるもの。「ナイ」は、普通語「ナニ」の「N」音脱落なり。古形は、名詞と結合して、特別指詞を作る場合と「コン川」・「アン山」の如く、助詞「ン」の添ひて價格を示す場合とのみ用ふ。「カ」・「ナ」は用ひねど、新古の關係を示すために擧げたり。「カイ」は「ナイデンカイデン」(何でも彼でも)の如き、特殊の場合にのみ用ふ。新形に、助詞「ワ」・「ヲ」の接する時は、融合して次表の如くなる。

融「ナ」 合の	融「ソ」 合の	近稱
コヨ、コユ	コヤ	中稱
ソヨ、ソユ	ソヤ	遠稱
アヨ、アユ	アヤ	不定稱
ナドヨ、ナドユ	ドヤ、ナヤ	

「ワ」の融合形は、「コラ」「ソラ」「アラ」「ドラ」となることあり。

第二節 特別指詞

地位・方向・數量・容態・時人の六種に分つ。

(一) 地位指詞 地位を指示する詞にて、近・中・遠・不定の四稱に分れ、原形は次表の如くにて普通語に異ならず。

近	中	遠	不定
稱	稱	稱	稱
ココ	ソコ	アスコ	ドコ

「アスコ」は、「アッコ」となることあり。地位指詞は、普通指詞の古形と、名詞「コ」(所)の意との熟語なれど、今は一語と見做す。

地位指詞に、助詞「ワ」「イ」の連る時は、左の如く融合す。

	近	中	遠	不定
	稱	稱	稱	稱
融「ア」合の	コカ	ソカ	アスカ	ドカ
融「イ」合の	コケ	ソケ	アスケ	ドケ

助詞「ガ」の續く時は、「コツガ」「ソツガ」の如く、「コ」が促音となることあり。

又、「ソコ」を「スコ」「ソケ」を「ヒケ」と、いふ所あり。廣き地位を指す時は、「ソタイ」を添へて、「ココソタイ(こちら)」「ソソコソタイ(そこら)」などいふ。「ソタイ」は、「之邊」の轉化なるべし。

(二) 方向指詞 方向を指す詞にて近・中・遠・不定の四稱に分る。

近	中	遠	不定
稱	稱	稱	稱

◎單語論

コッチ、コッチャ	ソッチ、ソッチャ	アッチ、アッチャ	ドッチ、ドッチャ
----------	----------	----------	----------

これは、普通指詞の古形と、名詞「チ」「チャ」「方」の意との熟語なれど、今は一語と見做す。
 「コッチャ」「アッチャ」は、普通語「コチラ」「アチラ」の轉化なり。助詞「ワ」「チ」が、「コッチ」「ソッチ」「アッチ」「ドッチ」に添ふ時は、融合すること、左の如し。

	近	中	遠	不定
融	融	融	融	融
「ワ」 合の	「ワ」 合の	「ワ」 合の	「ワ」 合の	「ワ」 合の
コッチョ、コッチュ	コッチャ	ソッチョ、ソッチュ	ソッチャ	アッチョ、アッチュ
			アッチャ	ドッチョ、ドッチュ
				ドッチャ

原形たる「コッチャ」「ソッチャ」…と、「ワ」の融合形たる「コッチャ」「ソッチャ」…とは、同形なれど、之を用ふる場合異なり。「コッチャガ右(こちらは)

「コッチャガ右(こちらは)」は、原形の例にて、「コッチャワリ(こちちは)」は、「ワ」の融合形なり。混ざる勿れ。

「コッチャ」「ソッチャ」等の「チャ」は、「コッチェ」「ソッチェ」などの如く、「チェ」なることあり。
 方向指詞に、更に方向の助詞を添へて、「コッチサメ」「ソッチセシ」「アッチセ」など用ふることもあり。

(三) 數量指詞 數量を指す詞にて、普通指詞と名詞「シヨ」「程」の意なる「シキ」の轉化との熟語なれど、一語と見做す。稱は前に同じ。

近	中	遠	不定
稱	稱	稱	稱
コシコ	ソシコ	アシコ	ドシコ
コイシコ	ソイシコ	アイシコ	ドイシコ

この外、不定稱に「イッラ」(數)、「イッタイ」(人數)をも用ふる。「コスコ」「ドヒコ」の如く、「シヨ」

◎單語論

が「スユ」・「ヒユ」となることあり。

助詞「ワ」の添ふ時は、融合して、「ユシカ」・「ソイシカ」の如く、語末「カ」となり、「イ」の添ふ時は、「ドシケ」・「アイシケ」の如く、語末「ケ」となること、地位指詞に同じ。

(四) 容態指詞 || 容態を指す詞にて、稱は前に同じ。

近稱	中稱	遠稱	不定稱
コ オ ゲン	ソ オ ゲン	ア ア ゲン	ド オ ケ ン

「イケン」は、「如何ニ」の轉化。「ユゲン」・「ソゲン」・「アゲン」・「ドゲン」は、普通指詞の古形と「氣ニ」との熟語なれど、一語と見做す。「ソゲン」は、約まりて「セン」ともなる。前表にあげたる外、「ユニョン」(近)「ソニョン」(中)「アニョン」(遠)「ドニョン」(不定)などいふこともあり。

り。こは、普通指詞の古形と、「様ニ」との熟語なれど、亦一語と見做す。「ユゲン」・「ソゲン」・「アゲン」・「ドゲン」・「イケン」が名詞に連る時は、「コケナ事」・「ソケナ事」の如く、「ン」が「ナ」に變ずることあり。

(五) 時指詞 || 時を指す詞にて、不定稱「イツ」(何時)の一語あるのみ。近・中・遠・三稱の場合には、「時てふ名詞に、普通指詞の古形と助詞「ン」この連語を冠して、「コン時」・「ソン時」・「アン時」などいふ。

(六) 人指詞 || 人のみを指示する詞にて、自己を指すを自稱、對手を指すを對稱、第三者を指すを他稱、指所者の不定なるを不定稱といふ。人指詞は、所指者の自分の高下に依つて、語を異にす。今、上中下の三級に分つて、主なる語を擧げん。

階級	自稱	對稱	他稱	不定稱
上級	ワタクシ(ワタシ)	オマイサマ オマンサア	アレスサア	ダイサア
中級	ワタシ(アタシ) ワタイ(アタイ)	オマハン オハイン	アキシ	ダイ ダイ
下級	オイ ワシ	ワイ ウン	アイ アンワロ	ドイ ドニヤツ

30

自稱「オイ」は、「オレ」の轉化。「ワ」が「家」の如く、稀には、自稱に「ワ」を用ふることもあり。對稱の「オマイ」(「御前」の轉化)は、「オマン」となることもあり。「オマハン」は、「オ前サン」の轉化にて、「オハン」はその略。「ワイ」は、文語の自稱「ワレ」の轉化。「ウン」は、「ウヌ」(奴)の轉化にて、「オン」ともなる。但し、自稱「オイ」も、「オン」「ウン」「イン」となることあれば、之と混すべからず。對稱に、「ワッコ」「アッコ」(「吾子」の意か)、「マシ」「ニシ」(主)、「ヤド」(宿)などもあれど、表には略しつ。

31

他稱の「アニス」「アキシ」は、「彼ノ人」の轉化。「アンワロ」は、「彼ノ野郎」の轉化。「アイ」は普通指詞の遠稱を借用せるなり。不定稱「ダイ」は、「ダレ」(誰)の轉化。「ドレヤツ」は、「何ノ奴」の轉化。「ドイ」は、普通指詞の不定稱を借用せるなり。「ダ」は、助詞「ガ」の添ふ場合の單數にのみ用ふ。

複數を示すには、助詞「ドモ」「ドン」「ガタ」「タチ」「ナンド」等を用ふるも、慣用あるを以て、ここに記さん。「ドモ」は、上級の自稱に限り用ふ。「ドン」は、「ドモ」の略にて、下級の各稱、及び、中級の自稱に用ふ。「オイ」「ワイ」に、「ドン」の連る時は、「オッドン」「ワッドン」などなることあり。

又、「ドン」は、「ウインド」(已等)の如く、「ド」なることあり。「マチ」は、自稱には殆ど用ひず。(稀に「ワタシマチ」)その他の各稱には用ふれども、下級には、「ワイ」に添ふることあるのみ。「ワイマチ」(汝等)は、約まりて「ワッチ」ともなる。「ナンド」は、中級・下級の自稱に用ふるを常とす。これが、「ワタシ」「アタシ」に連る時は、「ワタハンド」「アタハンド」「ワタアンド」「アタアンド」などとなることあり。稀には、「ウインドラント」(吾等)の如く、「ラント」となることもあり。

「シ」に終る人指詞に、助詞「ワ」の添ふ時は、「ワタシ」の如く融合して「:シヤ」となり「チ」の添ふ時は、「ワダシ」「ワタシ」の如く「:シヨ」「:シユ」となる。「イ」に終る語に、「ワ」の融合する時は、「オマヤ」の如く「:イヤ」となり、「チ」の融合する時は、「オマヨ」「オマユ」の如く「:ヨ」「:ユ」となる。

複数を示す「ドモ」「ドン」に、「ワ」の添ふ時、「ドマ」となり、「イ」の添ふ時は、「ドメ」となる。「マチ」に「ワ」の添へば、「マチヤ」「チ」添へば「マチヨ」「タチュ」となる。「ガタ」に、「イ」の添へば「ガテ」となり、「ナンド」に、「ワ」の添へば「ナンダ」「イ」の添へば「ナンデ」となる。その他の融合法は、名詞に準して類知すべし。

* * *

名詞・指詞を總稱して牀言といふ。作用の本牀たる語なればなり。

第三章 靜 詞

事物の性質、状態、存在をいふ詞の中、一定の形式を有するものを、靜詞、又は、形容詞とす。

◎ 單 語

靜詞は、職分の異なるに従つてその形を變ず。されど、それは全体の變化にあらず。變化する部分と、せざる部分とあり。變化する部分を語尾といひ、變化せざる部分を語根といひ語尾の變化を活用といふ。

第一節 活用及其種類

靜詞の活用は、文語に於て二種、普通語に於て一種なるが、鹿兒島語のそれは、四種あり。その活用の狀を説明せん。

- (甲) ヌヤ、アメ。(アマカ) 〓これは、甘い。
- (乙) ヌヤ、クレ。(クロカ) 〓これは、黒し。
- (丙) コヤ、フリ。(フルカ) 〓これは、古し。
- (丁) オイモ、カナシイ。(カナシカ) 〓おれも、悲し。

などは、文の終結となるを以て、終止形といふ。終止形は、各活用共、二種あり。一アメモ

- 一「アマカモン」(甘い物)の如く、終止形の躰言に連る場合を、連躰形と稱す。
- (甲) アモ、ナッタ。〓甘くなつた。
- (乙) シロ、ナッタ。〓黒くなつた。
- (丙) フル、ナッタ。〓古くなつた。
- (丁) カナシ、ナッタ。〓悲しくなつた。

の如く、用言(動詞靜詞の總稱)に連りて、その意義を限定する活用を、副詞形、又は、連用形といふ。

- (甲) アマサ。〓甘さ。
- (乙) シロサ。〓黒さ。
- (丙) フルサ。〓古さ。
- (丁) カナシサ。〓悲しさ。

の如く、名詞となる活用を名詞形といふ。
 辭詞の變化は、右の如し。「アマカ」の如き變化をなすを甲類、「クロカ」の如く變化するを乙類、「フルカ」の如きを丙類、「カナシカ」の如きを丁類とす。左に、四類活用の語尾變化を表す。

種類	語根例	終止形	第終止形	副詞形	名詞形
甲類	AM (甘)	E	AKA	○	ASA
乙類	KUR (黒)	E	OKA	○	OSA
丙類	FUR (舌)	I	UKA	D	USA
丁類	KANAS (悲)	II	IKA	YU	ISA

假名にて記し難きを以て、羅馬字を用ひたり。

文語の辭詞には、假定・確定の條件をあらはす活用あれど、鹿兒島語にはなし。假定の條件をあらはすには、「アメナラ、ノメ」「アマカナラ、ノメ」「甘くば飲め」の如く、終止形に助詞「ナラ」を添へ、確定の條件をあらはすには、「アメデ、ノメ」「アマカデ、ノメ」「甘ければ飲め」の如く、終止形に助詞「デ」を添ふ。又、文語の副詞形は、中止をあらはせど、鹿兒島語のは、必ず副詞形に、動詞「シ」の添ひてあらはす。例へば、ミヤシロシ、カミヤシテ。(墨は黒く、紙は白し)の如く。名詞形に、助詞「イ」の添ふ時は、融合して、「アマセ」「甘さじ」「シロセ」「黒さじ」などなる。一種の副詞なり。

アマカ(甘)、ナカ(無)、イタカ(痛)、チク(近)、クセ(臭)、

の如く、文語の全活所屬の中、語根末に「ア」韻を含むものは、皆甲類活用をなし。

○フトカ(太)、シロカ(黒)、ヨカ(善)、メンデ(面倒)、オセ(遅)、
 の如く、文語の全活所属中、語根末に「オ」韻を含むものは、總て乙類活用に属し。
 ヤスカ(廉)、フルカ(古)、アツカ(暑)、カリ(輕)、シビ(澁)、
 の如く、文語の全活所属中、語根末に「ウ」韻を含むものは、皆丙類活用に属し。
 カナシカ(悲)、ウレシカ(嬉)、メツラシカ(珍)、
 の如く、文語の不全活所属の語は、皆丁類活用に属す。

第二節 語根の音韻轉化

語尾については前節に述べたれば、本節に於ては、語根の音韻轉化を述べん。されど、大
 体、名詞の場合に同じきを以て、主なる例を擧ぐるに止む。

一 促音となれる例

シツカ||澁イ、アツカ||赤イ、タツカ||高イ、オツカ||重イ、ネツカ||眠イ、ケツカ||烟イ、
 ミツケ||短イ、アツネ||危イ、スツネ||少イ、イツカギエ||潔イ、オボツカ||覺束無イ、

二 撥音となれる例

チンセ||小サイ、サンカ||寒イ、オボツカ||ナカ||覺束無イ、スツネ||少イ、ナツカ||長イ、
 ウツメ||旨イ、ハカ||ネ||抄無イ、ツラン||ニキ||面憎イ、ミト||ネ||見トモナイ、

三 其他の轉化例

セバカ||狭イ、ネフカ||眠イ、フイクセ||古臭イ、キサネ||汚イ、オトロシ||恐シイ、
 シトカ||白イ、ワカ||悪イ、サシカ||久シイ、ヨシ||宜シウ、ホスカ||細イ、
 オスカ||遅イ、トワカ||遠イ、チメテ||冷イ、ヨラカ||柔イ、チヨレ||手緩イ、

第三節 使用法の相違

◎單語論

辭詞にも、意義を轉用せるもの、組立の異なるもの、古語に屬するもの、系統不明のもの等あり。左に、その例を擧げん。

- ニカ(古) || 新シイ、イテ(痛) || 熱イ、キボスカ(氣細) || 心細イ、キカ || 黄色イ、イヤシカ(卑) || 貪食、モゲ || 甘過グ、カカラネ || 突飛、ツガラネ突飛、ゲネ || 氣ノ毒、トセシネ || 徒然、イタイモナカ(到りも無い) || 淫猥又は尾籠、キスカ || 疲レテ苦シイ、シンドカ(勞) || 同上、テツカ(大) || 同上、ズッネ(術無) || 苦シイ、トッゲンチカ(時限無い) || 意外、ムゼ || 可愛イ、キミクセ(黄味臭い) || 黄ナ臭イ、オセラシカ || 大人シイ、グラシカ || 憫ッホイ、カシラナカ || 碌デモナイ、ガレヂユカ(岩) || 丈夫、ヤゼロシカ || 五月蠅イ、オゼ || 怖イ、メメクルシカ || 五月蠅イ、ヤゼクロシカ || 同上、ツンブイカ || 低イ、クッセラシカ(臭う) || シマラ臭イ、オロヨカ || 粗末、テッセンネ || 意外、テュンシモネ || 同上、ヂビシカ || 放埒、ズッサラシカ || 同上、シモネ || ズルイ、セカラシカ || 八ヶ間敷、エツラシカ || 恐シイ、

第四章 動詞

事物の動作・状態・存在をいふ詞の中、一定の形式を有するものを、動詞といふ。動詞も活用す。従つて、語根も、語尾もあり。

第一節 活用及其種類

動詞の活用は、文語に於て九種、普通語に於て五種なるが、鹿兒島語のは五種あり。即ち、五段活用、未成五段活用、二段活用、加行變格活用、左行變格活用、これなり。

(一) 五段活用 所屬動詞「書ク」に付て、活用の状を示さん。

○字ヲ、書カン。○字は、書かない。

◎單語論

これを否定形といふ。助詞「シ」の付きて、否定をあらはす活用なればなり。されど、他の助詞添へば、異なる職分をあらはすは、いふまでもなし。唯、著名なる職分に依つて、命名せるものと知るべし。その他の活用名、亦然り。

○書キガ、ナル。〓書くことが、出来る。

この活用は、名詞となるを以て、名詞形といふ。又の名を連用形といふは、用言に連るを以てなり。

○字、書ク。〓字を、書く。

この活用は、文の終結となるを以て、終止形といふ。牀言に連るにも、この活用よりするが故に、連形ともいふ。

○メニチ、書ケバ、シヨシナル。〓毎日書けば、上手になる。

この活用は、假定の條件をあらはすが故に、仮定形といふ。

○ワイモ、字、書ケ。〓君も、字を書け。

この活用を命令形といふは、命令をあらはせばなり。

○オイモ、字、書ユ。〓僕も、字を書かう。

この活用は、未來の意を有するを以て、未來形といふ。未來形は、自然、推量をもあらはす。

右の如く、「書ク」の語尾は、「カ」(否定)・「キ」(名詞)・「ク」(終止)・「ケ」(假定)・「コ」(未來)の五様に變化す。かく、「ア」・「イ」・「ウ」・「エ」・「オ」の五段に活用する動詞を、五段活用といふ。

而して、之には、「カ」行、・「ガ」行、・「サ」行、・「タ」行、・「ナ」行、・「ハ」行、・「マ」行、・「ラ」行、・「ワ」行の九種あり。

◎單語論

行名	語根例	否定形	名詞形	終止形	命假 令定 形形	未來形
カ行	カ(書)	カ	○キ	○ク	ケ	コ
ガ行	ヌ(脱)	ガ	○ギ	○グ	ゲ	ゴ
サ行	ダ(出)	サ	○シ	○ス	セ	ソ
タ行	タ(立)	タ	○チ	○ツ	テ	ト
ナ行	シ(死)	ナ	○ン	○ン	ネ	ノ
ハ行	ト(飛)	ハ	○ビ	○ブ	ベ	ボ
マ行	ヨ(讀)	マ	○ン	○ン	メ	モ
ラ行	オ(居)	ラ	○イ	○ル	レ	ロ

ワ行	カ(買)	ワ	○イ	ウ	エ	チ
----	------	---	----	---	---	---

終止形の中、「ク」「グ」「ス」「ツ」「ブ」「ル」の六つは、母韻脱落して促音の如くなるを常とす。名詞形の「キ」「ギ」「シ」「チ」「ビ」が、名詞たる場合、亦然り。ワ行の名詞形は、「ウイケ」(賣買ひ)、「カエ」(通ひ)、「シ」(吸ひ)の如く、第一章第一節(五)の例と、同じ變化をなす。名詞形に、過去の助詞「タ」の添へば、「タ」行・「ラ」行の語尾は、促音化し「立ッタ」「居ッタ」の如く、「ハ」行・「マ」行・「ワ」行のは、「トダ」(飛ッダ)、「ヨダ」(讀ッダ)、「ユタ」(買ッタ)の如く、語尾消失し、「カ」行・「ガ」行・「サ」行は、「ケタ」(書イタ)、「テタ」(解イタ)、「シタ」(好イタ)、「ニダ」(脱イダ)、「ケダ」(潛イダ)、「デタ」(出シタ)、「エタ」(押シタ)の如く、「キ」「ギ」「シ」の父音脱落して「イ」となり、更に、第一章第一節(五)の例と同じ理法に依つて變化す。前表には、唯、其原形を示せるのみ。

◎單語論

文語の四段活用・下一段活用・奈行變格活用・良行變格活用に属したるものにして、本縣に用ひらるる動詞は、皆五段活用に属す。されば、全動詞の八九分は、五段活用なりと知るべし。

文語靜詞の副詞形と、動詞「アル」と結合せるものは、「ラ」行五段活用に属すべきなれど、活用の状、少しく異なり。否定形は、「甘カヤ」「黒カヤ」などなりて、假定條件をあらはし、否定助詞は添はず。名詞形は、「黒カッタ」「甘カッタ」の如く、過去助詞のみ添ひて、名詞となることなし。假定・命令の二形は、用ひず。終止形は、「ル」消失して、「甘カ」「黒カ」などなるも、こは、便宜上、靜詞の二活用と見做せり。未來形は、「甘カロ」「黒カロ」となること、普通の「ラ」行五段活用動詞と同じ。

(二) 未成五段活用 「起キル」の變化、左の如し。

- 否定形 ハヨ、起キランカ。〓早く、起きないか。
- 名詞形 起キ方が、ハエ。〓起き方が、早し。
- 終止形 オイモ、起キル。〓僕も、起きる。
- 假定形 今、起キレバ、ヨカロ。〓今起されば、よからう。
- 命令形 ワイモ、ハヨ、起キレ。〓君も、早く起きよ。
- 未來形 オイモ、起キロカイ。〓僕も、起きようか。

語根例	否定形	名詞形	終止形	假定形	未來形
オキ(起)	ラ	〇	ル	レ	ロ

この活用は、「ラ」行の一種にして、「ラ」行五段活用と異なるは、名詞形の語尾なきにあり。

故に、未成五段活用といふ。文語の上二段活用・上一段活用所属動詞中、本縣に用ふるもの、及、下二段活用の「出ル」「寢ル」は、この活用をなす。但し、「出ル」「寢ル」は、「テラ」「ネラ」「否定」「テ」「ネ」(名詞)「ツル」「ヌル」(終止)「テレ」「ネレ」(命令)「ツレ」「ヌレ」(假定)「テロ」「ネロ」(未來)となりて、語根に下二段活用の面影を存す。

(三)二段活用 「投グル」の變化、次の如し。

○否定形 石、投ゲンカ。石を、投げないか。

○名詞形 ヨケ、石投ゲガアル。ここに、石投げがある。

○終止形 オイモ、投グル。僕も、投げる。

○假定形 石、投グレバ、アフネ。石を投げれば、危い。

○未來形 オイモ、投グ(投ギ)カイ。僕も、投げようか。

○命令形 ワイモ、ハヨ、投グ。君も、早く投げよ。

右の如く、「ウ」「エ」の二段に活用する動詞を、二段活用といふ。文語の下二段活用所属動詞の中、「出ル」「寢ル」の外は、これに属し、「カ」行「ガ」行「サ」行「ヤ」行「タ」行「ダ」行「ナ」行「ハ」行「マ」行「ヤ」行「ラ」行の十一種あり。左に、その活用表をのべ。

行名	語根例	命名否	命令	終止形	假定形	未來形
カ行	ウ(受)	ク	ケ	クル	クレ	ク(キ)
ガ行	ナ(投)	ゲ	ゲ	グル	グレ	グ(ギ)
サ行	ノ(載)	セ	セ	スル	スレ	ス(シ)
ザ行	マ(交)	ゼ	ゼ	ズル	ズレ	ズ(ジ)

◎ 早 語

タ行	タ (立)	テ	ツル	ツレ	ツ (チニ)
マ行	マ (撫)	デ	ヅル	ヅレ	ヅ (ヂニ)
ナ行	ナン (尋)	ネ	ヌル	ヌレ	ヌ (ニニ)
ハ行	シラ (調)	ベ	ブル	ブレ	ブ (ビニ)
マ行	ハシ (始)	メ	ムル	ムレ	ム (ミニ)
ヤ行	ユ (肥)	エ	ユル	ユレ	ユ
ヲ行	ク (與)	レ	ルル	ルレ	ル (リニ)

「ヤ」行を除く外、未來形は二種あり。終止形末の母韻は、脱落して、促音の如くなるを常とす。

(四) 加行變格活用 之に属するは、「來ル」の一語にて、左の如き變化をなす。但し、この語は全軀變化し、語根・語尾の別なし。

- 否定形 ハヨ、コンカ。|| 早く、來ないか。
- 名詞形 キカタガ、ハエ。|| 來方が、早い。
- 終止形 キユワ、オイモ、クル。|| 今日、僕も來る。
- 假定形 ハヨ、クレバ、エガ。|| 早く來れば、よしが。
- 命令形 ハヨ、モツケ。|| 早く、持て來い。
- 未來形 キユワ、アイモ、ク。|| 今日、彼れも來よう。

否定形	名詞形	終止形	假定形	命令形	未來形
ユ	キ	クル	クレ	ケ	ク

◎ 早 語

(五) 佐行變格活用 之に屬するは、「スル」(爲)の一語にて、左の如く變化す。この語も、語根・語尾の別なし。

○否定形 オヤ、ナイモ、セン。〓僕は、何にもしなす。

○名詞形 オイモ、シヤ、シガナル。〓僕も、それは出来る。

○終止形 ツスバシナ、オイガ、スル。〓留守番は、僕がする。

○仮定形 ハヨ、スレバ、ヨカロ。〓早くすれば、よからう。

○命令形 ヨユ、ハヨ、セ。〓用意を早くせよ。

○未來形 オイモ、ヒシネナス(シニ)。〓僕も、晝寝をしよう。

これを表示すれば、左の如し。

命令形	否定形	名詞形	終止形	假定形	未來形
-----	-----	-----	-----	-----	-----

セ	シ	スル	スレ	ス(シニ)
---	---	----	----	-------

この動詞は、「運動スル」・「病氣スル」の如く、名詞に結合すること、甚だ多し。

以上、各活用の終止形末の母韻は、脱落して、促音の如くなるを普通とす。

第二節 語根の音韻轉化

前節に記せる如く、語尾の異なる上、語根にも音韻轉化行はれ、殆ど完膚なきに至れるが多し。左に、著名なるものを擧ぐ。

- クツサル〓腐る、オツキヤガル〓起上る、イツキョウ〓行合ふ、エツツク〓追付く、ヌツル
- 〓仰反る、ウツナウ〓失ふ、ナレコム〓投込む、ノレンクン〓飲込む、タムル〓尋ねる、
- ウウ〓追ふ、オエグ〓泳ぐ、メル〓參る、ヒク〓吹く、フク〓引く、ヌナ〓伸ぶ、モス
- 〓蒸す、イゴク〓動く、コチヨグル〓櫂ぐる、コナス〓懲らす、カゴム〓屈む、イナウ

荷ふ、スバル||坐る、エシ||置く、オソユル||教へる、トカス||倒す、トクル||倒る、
ヨクウ||愁ふ、チチム||縮む、シャコム||踏む、オヂル||下りる、ハスム||挟む、
シノム||嫉む、キビル||縊る、ホコル||蔓る、コラシ||乾く、シヤヌ||壊す、フクル
||折ける、オスクル||押付ける。

第三節 使用法の相違

動詞にも、語根・語尾の轉化せるものの外、意義を轉用せるもの、組立の異なるもの、系統不明のもの等あり。左に、その著しきものを擧げん。

ネマル||餓る、カシマル||數へる、カシズル||同上、オラブ||叫ぶ、オズム||覺める、
ウツシ||疼む、クセル||反る、ダレル||疲れる、タモル||食べる、サロク||歩む、
ホタル||投げる、アユル||落ちる、カズム||喫む、キバル||怖れる、イミル||殖える、

オットル||盗む、ウルル||熟する、メッバル||見つめる、クビル||結ぶ、クサル||綴ぢる、
イシタル||溢れる、カルウ||負ふ、カカル||觸れる、カタムル||擔ぐ、スポウ||這ふ、
ハッチシ||逃げる、ツカマユル||捕へる、ネギル||睨む、モガル||強請る、チヨクラカス
||擲擲ふ、ネチル||病む、アマル||戯れる、ムッキヤグル||嘔吐する、ネズム||抓る、
コヤス||引抜く、ヨッコロブ||横はる、ホメク||蒸す、テナム||連立つ、マグルル||
氣絶する、ガル||叱る、イツカヤス||覆す、ウツチヨク||追越す、置く、ウツヒル||
嘘つく、フム||履く、ミシクル||見出す、クル||往く、アンドスル||飽く、スクルル||
痿れる、サス||咲く、セシ||混雜する、閉ぢる、腹痛む、タグルウ||悶く、ヌスクル||
塗る、ハラカシ||腹立てる、ホガス||穴開ける、ハコウ||取合ふ、ナオス||納める、
ヘアガル||攀ぢる、サツシロウ||錆びる、

第四節 強勢動詞

勢力を強むるため、特に、動詞を附加すること多し。

(一)「打ち」を冠せる例

ウチクウ食ふ、ウツスル捨てる、ウツチュウ言ふ、イツチョコ置く、イッコボス覆す、イツチュウ言ふ、チワスルル忘れる、チコロブ顛ぶ、

などの「ウツ」「ョツ」「チ」は、皆「打ち」の轉化なり。

(二)「引き」を冠せる例

ヒツカグ缺く、ヒツカム咬む、ヒツタマガル魂消る、ヒキノム飲む、ヒメヌブ伸ぶ、ヒメヌブル甜ぶる、シツツク附く、シツチャユル落ちる、フツチャブル被ぶる、

などの「ヒツ」「ヒシ」「シツ」「フツ」は、皆「引き」の轉化なり。

(三)「掻き」を冠せる例

ケカルル枯れる、ケシシダ死んだ、ケキユル消える、ケツサル腐れる、ケシネグル逃げる、ケシナブル騷ぶる、

などの「ケ」「ケツ」「ケシ」は、「掻き」の轉化なり。

(四)「突き」を冠せる例

ツツカカル觸れる、ツツグアル割る、ツツパシル走る、ツツサク裂く、ツツクシル挟る、ツツコロス殺す、

右の「ツツ」は、「突き」の轉化にして、「ツツ」は、「踏み」の轉化なり。

(五)「タクル」を添へたる例

ワレタクル笑ふ、フンタクル踏む、イタクル言ふ、エタクル追ふ、モンタクル

揉む、ツツタクル突く、

「タクル」は、「蹂る」「廻はす」などいふ程の意あり。

第五節 動詞の性

水が、流ルル。 人が、ウツトクル(倒れる)。

の如く、それ自身の動作をあらはす動詞を、自動詞といひ、

人が、水ヲ流ガス。 牛が、人ヲツツトカス(倒す)。

の如く、目的ある動作をあらはす動詞を、他動詞といふ。而して、他動の目的たる語、即ち、「水ヲ」「人ヲ」の如きを、客語と稱す。

* * * * *

辭詞・動詞は、作用をあらはす語なるを以て、用言といふ。

第五章 副詞

用言、又は、他の副詞の意義を限定する語を、副詞といふ。

副詞の多數は、名詞・指詞・辭詞・動詞・助詞、若しくは、これ等の複合語を轉用せるものなり。

第一節 音韻の轉化

前述の如く、副詞の多數は轉來のものなれば、音韻轉化の如き、他詞に準じて知るを得べけんも、左に著しきを擧ぐ。

イッキ直、タツチン直に、ステイ既に、ユネタ此間、サツカラ先から、インマ全後刻、サシカブイ久振、イツデン何時でも、メニチ毎日、ヤガチヤガツテ聽、

◎ 單 語 論

モヘ||最早、ソテ||外に、ムケ||向に、タツ||度々、タツタ||唯、ミシナ||皆、
 シッタイ||悉皆、オカタ||大方、ヤイト||スレバ||動もすれば、カカシメ||逆に、
 ケツチャ||却て、サイモイ、シヤイモイ||遮二無二、ゼシト||是非とも、ムウツ||毛頭、
 イツチロン||一様に、テセチ||大切に、オメガケン||思ひ掛りもなく、ワルスト||
 悪くすると、ヒトチ||一つに、メツテ||滅多に、テゲ||大概、

第二節 使用法の相違

副詞にも、意義を轉用せるもの、組立の異なるもの、系統不明のもの等あり。左に、主なるものを擧ぐ。

・ イットキ(時)||暫く、チユン(近)||先達、ハイト、ヘット||常に、カネヘイゼイ(兼平)||
 平生、ミッセ(右)||右へ、ワゼ||甚だ、ワゼシコ、オシシコ、エシユ、エユ、エコチ、

ツンバイ、ウカモン、ウグツ、フテコツ、ギジト、ゴイト||澤山、ゴロツト、ゴロイト、
 ブロツト、ガツサイ、ゴツソイ||總て、ガツソイ||丁度、又は、甚だ、ヨシニ||餘計に、
 シヤツチ||是非、ウントスントシ、ウンダトシツピタトシ||何とも、チユイ||暗に、カタイクチ
 ||互に、カシメツ(掛へ)||決して、ミケ||見に、ナシケ||何しに、ゲンシテン、ゲツセン
 何うしても、ナシタラコテシ||何と云はれても、チヨドントキ||生憎、ヒョットスト||或は、
 ドクストップニ||様に、ユウド||よくく、ヒツチャコツチ、アツチャコツチ||反對、
 ヤイメンノ||矢鱈に、マレケイニ||稀に、ヨカシコ||適量、又は、澤山、イッチ||最、
 ネツカラ||總て、イッチオン||一つも、

第三節 音 畫

副詞の中、音響、又は、容態を直寫せるを音畫といふ。音畫は、一般言語と異なるを以

て、特に、節を分つて主なるものを擧ぐることにせり

ヨロイ〜、ヨット〜||よろ〜、ユルイト||ゆるりと、ウロイ〜||うろ〜、
 クラット||ぐらりと、ドッサ〜||どし〜、ポロイ〜||ぼろ〜、ヒライ〜||
 ちく〜、ホット||うんざり、ウシナ〜、ウシナクイ〜||なよ〜、ヨシゴヒヒ〜||
 くね〜、ゴン〜||ずん〜、アクッサント||ばんやりと、メッサイ||がっかり、ガシブイ、
 ツンバイ||なみ〜と、チヨロイト||ちらと、ヨッポイ〜||よぼ〜、ボヤット||ぼつと、
 ブツツイ||びっしり、チョコカット、チヨッコイ||ちよいと、チンボ〜、チシ〜||ちび〜、
 * * * * *

名詞・指詞・靜詞・動詞・副詞は、文の要部となる語なるが故に、主要詞と名付く。

第六章 助 詞

主要詞につきて、或る意義を添ふる詞を、助詞といふ。

助詞には、活用するものと、せぬものとあり、前者を活助詞、後者を不活助詞といふ。

第一節 活助詞

活助詞に、所相・勢相・役相・敬相・指相・希望・否定・時の八種あり。

(一) 所相||受動をあらはす助詞にて、「ルル」「ラルル」の二語あり。

○ 否定形
 オヤ、アイカラ、タタカレン。|| 僕は、彼から打たれない。
 オヤ、アイカラ、ナゲラレン。|| 僕は、彼から投げられない。

○ 名詞形
 タタカレカタガ、ヒドカッタ。|| 打たれ方が、ひどかった。
 ナゲラレカタガ、ヒドカッタ。|| 投げられ方が、ひどかった。

○ 終止形
 インガ、フドカラ、タタカルル。|| 犬が、人から打たれる。

◎ 單 語 論

◎ 單 語 論

「オイモ、アイニヤ、ナゲラルル」○〔僕も彼には、投げられる。〕

○ 假定形

タタカルレバ、イタカロ○〔打たれれば、痛からう。〕
ナゲラルレバ、イタカロ○〔投げられれば、痛からう。〕

○ 未来形

インナ、シトイ、タタカル〔リニ〕○〔犬は、人に打たれよう。〕
オイモ、アイニヤ、ナゲラル〔ラリニ〕○〔僕も、彼には投げられよう。〕

○ 命令形

ワイモ、アイカラ、タタカレ○〔君も、彼から打たれよ。〕
ワイモ、アイカラ、ナゲラレ○〔君も、彼から投げられよ。〕

レ	命令形	終止形	假定形	未来形
ル				ル <small>〔リニ〕</small>

ラレ	ラルル	ラルレ	ラル <small>〔ラリニ〕</small>
----	-----	-----	-------------------------

右の如く、「ラ」行二段活用と同じ活用をなす。命令形を用ふる場合は、甚だ稀なり。

「ルル」は、五段活用及、未成五段活用動詞の否定形に、「ラルル」は、その他の動詞、及、役相助詞の否定形に連なる。但し、「ラルル」の佐行變格活用に連なる時は、「御馳走サル」の如く、「セラルル」が「サルル」となる。

(二) 勢相 所相の助詞が、次の例の如く、可能の意をあらはす場合をいふ。されば、活用も、連続も、所相に同じ。〔但し、命令形は用ひず。〕

○ 夏ノ朝ワ、ハヨ、起キラルル○〔夏の朝は、早く起きられる。〕

○ 錢セカアレバ、ナイデン、買ワラルル○〔錢さへあれば、何でも、買はれる。〕

◎ 單 語 論

勢相の助詞の代りに、「ハヨ、起キガナル」(早く起き)の如く、動詞「ナル」を用ふることあり。

(三) 役相。使役の意をあらはす助詞にて、「スル」「サスル」の二語、之に属す。活用は、「サ」行二段活用の動詞に同じ。

○ 否定形
ワイニヤ、本ナ、讀マセ_ン。○_{お前には、本は讀ませない。}
ワイニヤ、戸ワ、アケサセ_ン。○_{お前には、戸は開かせない。}

○ 名詞形
讀マセ_レ方が、上手_デチャロ。○_{讀ませ方が、上手だらう。}
アケサセ_レ方が、ア_レマイハエ。○_{開かせ方が、餘り早い。}

○ 終止形
教員ガ、生徒イ、本ノ、讀マスル。○_{教員が、生徒に、本を、讀ませる。}
教員ガ、生徒イ、戸チ、開ケサスル。○_{教員が、生徒に、戸を、開かせせる。}

○ 假定形
メニチ、讀マスレバ、上手ナル。○_{毎日讀ませれば、上手にならう。}
戸チ開ケサスレバ、ヨカロ。○_{戸を開かせれば、よからう。}

○ 命令形
オイモ、本ノ、讀マセ。○_{僕にも、本を讀ませよ。}
オイモ、戸チ、開ケサセ。○_{僕にも、戸を開かせよ。}

○ 未來形
ワイモ、本ノ、讀マス(シ)カイ。○_{お前にも、本を讀ませようか。}
モウ、戸チ開ケサス(サ)シニヤ。○_{もう、戸を開かせようや。}

命名否	命令形	終止形	假定形	未來形
セ	サセ	スル	スレ	ス(シ)ニ
	サスル	サスレ	サス(サ)シニ	

勢相の助詞の代りに、「ハヨ、起キガナル」(早く起きられる)の如く、動詞「ナル」を用ふることあり。

(三) 役相。使役の意をあらはす助詞にて、「スル」「サスル」の二語、之に属す。活用は、「サ」行二段活用の動詞に同じ。

○ 否定形
ワイニヤ、本ナ、讀マセン。○お前には、本は讀ませない。
ワイニヤ、戸ワ、アケサセン。○お前には、戸は開けさせない。

○ 名詞形
讀マセ方が、上手チャロ。○讀ませ方が、上手だらう。
アケサセ方が、アンマイハエ。○開けさせ方が、餘り早い。

○ 終止形
教員ガ、生徒イ、本ノ、讀マスル。○教員が、生徒に、本を、讀ませる。
教員ガ、生徒イ、戸チ、開ケサスル。○教員が、生徒に、戸を、開けさせる。

○ 假定形
メニチ、讀マスレバ、上手ナル。○毎日讀ませれば、上手にならう。
戸チ開ケサスレバ、ヨカロ。○戸を開けさせれば、よからう。

○ 命令形
オイモ、本ノ、讀マセ。○僕にも、本を讀ませよ。
オイモ、戸チ、開ケサセ。○僕にも、戸を開けさせよ。

○ 未來形
ワイモ、本ノ、讀マス(シ)カイ。○お前にも、本を讀ませようか。
モウ、戸チ開ケサス(サシ)ヤ。○もう、戸を開けさせようや。

命名否	命令形	終止形	假定形	未來形
セ	スル	スレ	ス(シ)キ	サス(サシ)キ
サセ	カスル	カスレ		

「スル」は、五段活用、及、未成五段活用の否、定形に、「サスル」は、その他の動形、及、所相助詞の否定形に連なる。但し、「サスル」の、左行變格活用に連なる時は、「辛抱サスル」の如く、「セ」を略す。

(四) 敬相 敬意をあらはす助詞にて、「モス」「ヤス」「ヤル」の三語あり。

○ 否定形
コヤ、オ目ニヤ、カケモハ(モサ)ン。 之は、お目には、
キユワ、ガツケニヤ、オ出ヤハン。 今日、學校には
アンシヤ、キユワ、キヤラン。 彼の人、今日は、
ワタヤ、ワゼ、ダレモシタ。 私は、大變、疲
イケシ、オシヤシ(ヤシ)タカ。 どう、なさい
ワゼ、ハヨ、キヤッタ。 大變、早く、御
出なさい。

○ 過去形
ヨカトナ、オ目イ、カケモス。 善いのを、お目
トホシネ、オイツッキヤス(ヤンス)。 大變、お急ぎ
アンシモ、イツキ、キヤル。 彼の人、直
に、お出下さい。

○ 終止形
オサイヂヤチ、下サイモシ。 お出下さい。
マア、オ上ガイヤシ(ヤンシ)。 まあ、お上が
オマイモ、ハヨ、キヤイ。 お前も、早く
ヨカトラ、オ目イ、カケモン。 善いのを、お目に、
キユワ、ガツケ、イキヤンソ。 今日、學校に、
アンシモ、キユワ、キヤロ。 彼の人、今日は、
來なさい。

○ 假定形
セン、泣キヤレバ、ミンナカナシユナロ。 そんなに、泣きなされ
ば、昔悲しうならう。
オサイヂヤチ、下サイモシ。 お出下さい。
マア、オ上ガイヤシ(ヤンシ)。 まあ、お上が
オマイモ、ハヨ、キヤイ。 お前も、早く
ヨカトラ、オ目イ、カケモン。 善いのを、お目に、
キユワ、ガツケ、イキヤンソ。 今日、學校に、
アンシモ、キユワ、キヤロ。 彼の人、今日は、
來なさい。

○ 命令形
マア、オ上ガイヤシ(ヤンシ)。 まあ、お上が
オマイモ、ハヨ、キヤイ。 お前も、早く
ヨカトラ、オ目イ、カケモン。 善いのを、お目に、
キユワ、ガツケ、イキヤンソ。 今日、學校に、
アンシモ、キユワ、キヤロ。 彼の人、今日は、
來なさい。

◎ 單 語 論

否定形	過去形	終止形	假定形	命令形	未來形
モサハ	モシ	モス	○	モシ	モソ
ヤハ	ヤンシ	ヤンス	○	ヤンシ ヤンセ	ヤンソ
ヤラ	ヤツ	ヤル	ヤレ	ヤイ	ヤロ

過去形とは、過去助詞のみ添ふを以て、名付けたるなり。

三語共、動詞、及、所相・勢相・役相助詞の、名詞形に連なる。

「モス」の下に、助詞の添ふ時は、「ユモソド」(言ひま)・「ユモソガ」(言ひま)の如く、「モン」となる。○「モス」は、又、「トーンス」(通り)・「トーンソ」(通りま)・「トーンサン」・「トーンハン」(通りま)・「トーンセ」(通りな)・「トーンシタ」(通りま)の如く、「モ」が「ン」となることあり。

更に、「ン」の省かれて、「トース」(通り)・「チコナス」(近くな)の如くなることあり。かかる場合は、上例の如く、語根に連なる。

右の外、動詞それ自身に、敬意を含むものあり。これらは、單獨に、或は、敬相助詞を添へて用ひらる。左に、重なるものを擧ぐ。

- コケ、ヨカ品ガ、ゴサイモス。○ ここに、善Sereh、ここに、善Sereh、
- ウチ、オサイヂヤンスカ。○ 内に、おいで、なされる。
- オカワイモ、オヂヤスメ。○ お遊りも、お出します。
- ユクサ、オヂヤシタ。○ お出、なされた。
- メシニ、メシアゲモハンカ。○ 飯を、お食べ、なされぬか。
- ソユ、アタイ、タモハンカ。○ それを、私に、下さいますか。

◎ 單 語 論

◎ 單 語 論

○オカメヤッタモンスナ。お摺ひ下
さるな。

○イケン、メシモスカ。いじりなさい
ます。

○ゴッケンウカゲ、メシタ。御機嫌伺ひに、
参りました。

○カケネワ、モシモハン。掛直は、申
しません。

○ダンサアチ、オコシアゲ。旦那様を、お
起し申せ。

○アンシャ、ナンチ、ギヤッタカ。彼の人は、何と
仰つしやうた。

○タッタ、今、マカシタ。只今、参り
ました。

○マチット、アゲモソカイ。あせうし、上げ
ませうか。

「ゴザイモス」は、約まりて、「ソチゴザス」(さうださ)・「ソチゴアス」(上)となり、「ゴサハ」・

「ゴアハ」(否定)・「ゴザシ」・「ゴアシ」(名詞)・「ゴザス」・「ゴアス」(終止)・「ゴザン」・「ゴアン

」(未來)と變化す。「ゴザス」は、又、「グザス」・「ゴザンス」・「ザス」・「ザンス」・「ツァンス」。

「ダンス」など、なることあり。

「オサイヂャンス」は、「居りなざりやんす」の約。「オヂャス」は、「おいでやす」の約。「ギヤル」

は、「言ひやる」の約なり。

(五)指定 事物を指定する助詞にて、「チャ」の一語、之に屬す。靜詞・動詞・活動詞には、終止

形に連なる。

○終止形 シトシ、コユラ、ワカラシモンヂヤ(チャツ)○人の心は、分
ちぬものだ。

○過去形 アンクワシヤ、ンメモンヂヤツタ○彼の葉子は、
旨かつた。

○未來形 キユワ、アメガ、フツチャロ○今日は、雨が
降るだらう。

終 止 形 — 過 去 形 — 未 來 形

◎ 單 語 論

ギヤ(ギヤツ) ————— ギヤツ ————— ギヤロ

(六)希望 希望をあらはす助詞にて、「ゴタル」、「タカ」の二語あり。

○終止形

オイモ、ミツチ、ノモゴタル。○ 僕も、水を飲みたい。
オイモ、ミツガ、ノンタカ(テ)。○ 僕も、水を飲みたい。

○副詞形

オヤ、ミツア、ノモゴツ(ゴタ)ナカ。○ 僕は、水は、飲みたい。
オヤ、ミツアノントナカ。○ 僕は、水は、飲みたい。

○過去形

オイモ、ミツチ、ノモゴタツ。○ 僕も、水を飲みたかった。
オイモ、ミツチ、ノンタカツ。○ 僕も、水を飲みたかった。

○未來形

ワイモ、ミツチ、ノモゴタロ。○ お前も、水を飲みたからう。
ワイモ、ミツチ、ノンタカロ。○ お前も、水を飲みたからう。

○名詞形

ノンタサガ、タマラレゴツナツタ。○ 飲みたくて、たまらないうちになつた。

○假定形

ワイモ、ノモゴタヤ、ノメ。○ お前も、飲めければ、飲め。
ワイモ、ノンタカヤ、ノメ。○ お前も、飲めければ、飲め。

終止形	副詞形	過去形	未來形	名詞形	假定形
ゴタル	ゴツ(ゴタ)	ゴタツ	ゴタロ	○	ゴタヤ
タカ(テ)	ト	タカツ	タカロ	タカ	タカヤ

「ゴタル」、「ゴタツ」、「ゴタロ」、「ゴタヤ」、「タカ」、「タカツ」、「タカロ」、「タカヤ」は、副詞形の「ゴツ」、「ト」に、動詞「アル」の融合せるなり。副詞形「ゴタ」は、「ゴツタ」の約なり。名詞形「タカ」に、助詞「イ」の添ふ時は、融合して「タセ」となる。「タカ」は、動詞、及、所

相・勞相・役相助詞の名詞形に、「ゴタル」は、活用語の終止形、又は、未來形に連なる。

「ゴタル」は、希望の外、比較・推量・様態をあらすことあり

○ ユンユメワ、ユッノゴタル。|| この米は、雪のやうだ。 —— 比較

○ キュワ、アメガ、フロゴタル。|| 今日は、雨が降りさうだ。 —— 推量

○ センガ、ナカゴツナッタ。|| 錢が、ないやうになつた。 —— 様態

(七) 否定 || 否定をあらはす、助詞にて、「ン」の一語あるのみ。動詞・活助詞の否定形に連なる。

○ 終止形 六時、デカケンニヤ、ナラン。|| 六時に、出掛けねばならん。

○ 確定形 勉強センニヤ、ナーハン。|| 勉強せねば、なりません。

○ 過去形 オヤ、チットシ、シラザツ(ダツ)タ。|| おれは、少しも知らなかつた。

○ 中止形 セシ、ユワチ、イッキ、キヤイ。|| そんなに、言はずに、直ぐ來なさい。

「ヂ」は、中止をあらはすを以て、中止形と名付けたり。

終 止 形	確 定 形	過 去 形	中 止 形
ン	ンニヤ	ザツ(ダツ)	ヂ

(八) 時 || 時に、過去・現在・未來の別あるも、現在・未來は、動詞自身にあらはすを以て、時の助詞としては、過去をあらはす「タ」の一語あるのみ。こは、動詞、及、活助詞の名詞形、又は、過去形に連なる。

○ 終止形 アメガ、フツタ。|| 雨が、降った。

○ 中止形 オイガ、ケチ(テ)、クルカイ。|| おれが、書いて呉れようか。

○ 確定形 オレ、メシタヤ、ツスゴアシタ。〔お禮に、参りました。〕

○ 未來形 ソケ、クワシガ、アツツロ。〔そこに、葉子が、あつたらう。〕

○ 並列形 デタイ、ヒックダイスル。〔出たり、引込んたりする。〕

終止形	中止形	確定形	未來形	並列形
タ	チ(テ)	タヤ	ツロ	タイ

「ナ」行・「マ」行の動詞に連る時は、濁音となる。「タイ」を並列形といふは、前例の如く、動作を並列する場合に用ふるが故なり。

中止形が、動詞「シ」に連る時は、「山ワタコシテ、ウミヤフケ」(山は高くし)の如く、省くを常とす。その他の動詞・活助詞に連る時は、「モツケ」(持つて)、「ミセツタモシ」(見せて)の如く、

促音化するか、又は、「ケチャル」(書いて)、「タツチャル」(立ち)、「シチヨル」(して居る)の如く、下の語に結合すること多し。中止形に、助詞「ワ」の添ふ時は、「ツキモシチャ」(就きま)の如く、「チャ」となるが普通なり。

静詞・動詞・活助詞の如く、活用する語を活用語といふ。

第二節 不活助詞

〔「ガ」 事物を指摘する詞にて、左の三つの場合に用ふ。〕

(1) 主格を示す場合

○ゴチンガ、ゴアハンナ。〔御馳走が、御坐いませぬ。〕

○キツガ、ヨカロ。〔聞くが、よからう。〕

(2) 領格を示す場合

○「ワガエ」、「ワガレ」、「オイガエ」(吾が家)、「ウレドレガエ」(汝等の家)、この場合の用例は、甚だ少し。

(3) 念を押す場合

○ワイモ、シツコロガ君も、知つて居らうが。

○ア山ワ、櫻島ヨッカ、タケガ彼の山は、櫻島より高いぜ。

「ガ」は、活用語には、終止形、又は、未來形に連なる。

(三)「ン」 「ガ」と同義にして、左の二つの場合に用ふ。

(1) 主格を示す場合

○ワイノ、ユタコタ、ワカラお前の、言つた事は分らん。

○ハナン、セチャル花の、咲て居る。

(2) 領格を示す場合

○アスコあそこン、ハタケンナカン、キツノハネ、コツノエガアル花に、蜘蛛の巣がある。

(三)「ニ」「イ」「ン」 地位・標準を指示する詞なり。

○ネツカラテ、一圓ニナス揃てで、一圓になります。

○ハシメチ、オ目イ、カカイモス始めて、お目に、かかります。

○インケンタツガ、チコン、見エル犬飼瀬が、近くに見える。

第一章第四節に記せる如く、「イ」が、語末「ア」「ウ」「オ」なる語に附く時は、融合して一體となる。

「イ」は「ニ」の父音脱落、「ン」は「ニ」の母韻脱落にして、三者共、靜詞には副詞形に、動詞。

活助詞には終止形に連なる。

(四)「ケ」 動作の標準を示す詞にて、動詞及所相・役相の助詞の名詞形のみ接続す。

○ワイモ、ミケコンカ。||君も、見に来ない。

○オヤ、タキ、タタカレケイタ。||おれは、漕にたたかれに行つた。

(五)「サメ」・「セン」・「セ」 共に、方向を示す詞なり。

○ワイタチヤ、アッチサメ、イケ。||お前たちは、あちらへ行け。

○アン木ガ、ミッセンケコロダ、||彼の木が、右の方へ倒れた。

○ワイモ、マチャット、前セモ、デレ。||お前も、少し前に出でよ。

「セン」・「セ」は、「サメ」の轉化なり。「サメ」は、「サマ」(「方」の意)に助詞「イ」の融合せるもの。

(六)「ナ」 目的、又は、差別を示す詞なり。

○イッキ、サケナ、デックレ。||直ぐ、酒を出してくれ。

○オイモ、コンカワナワタロ。||おれも、この川を渡らう。

「ナ」が、「ン」の下にある時は、「本ノ、見セツマモシ」。(本を見せ)の如く、「ノ」となる。又、

語末「イ」韻の語に續く時は、第一章第四節に述べたる如く融合す。

(七)「ワ」 差別を示す語。活用語には、副詞形に連なる。

○キョウヨカ天氣チヤ、ゴアハンカ。||今日は、好い天氣では、御座いません。

「ン」音の下に續く時は、「本ナ、モッキタカ」。(本は、持つて)の如く、「ナ」となる。語末に「イ」。

「ウ」・「オ」韻を有する語に續く時、融合することは、第一章第四節に述べたり。助詞「ニ」。

「イ」に連なる時は、「自分」ニナ、デクツツモイデオル(自分には、出来る)「間イナ、アワン」(合はぬ)

「メニヤ、アワン」(問には、合はぬ)などとなる。

(八)「ン」 差別をわらはず詞にて、左の二つの場合に用ふ。

(1) 動詞・活助詞の假定形に添うて、條件をわらはず場合

○ 雨が、降レバ涼シユナッチャロ。|| (雨が降れば、涼しくなるだらう。)

○ ツヤ、モマスレバ、ユナッガ。|| (それは、揉ませれば、よくなるよ。)

(2) 「チ」に添うて目的を示す場合

○ オヤ、チャチバナダ。|| (おれは、茶を飲んだ。)

(九)「モ」「ン」 一致を示す詞にて、「ン」は、「モ」の母韻脱落なり。

○ コイモ、ソイモ、アイモ、ミンナヨカ。|| (これも、それも、あれも、皆よし。)

○ 蚊イ、刺レチ、ネテン、オキテン、オラレン。|| (蚊に刺れて、寝ても、起きても、居られぬ。)

活用語には、辭詞の副詞形と、過去時の助詞「テ」に連なる。

(一〇)「デ」 指定の詞にて、左の三つの場合に用ふ。

(1) 標準を示す場合

○ コントワ、鹿兒島デ、ケモシタ。|| (この物は、鹿兒島で、買ひました。)

○ オカゲサアデ助カイモシタ。|| (お陰様で、助かりました。)

之に、「ツ」の添ふ時は、「ソイヤ、暮シガデッメ」(それでは、暮しが、暮しが出るまい。)(の如く、「チャ」となる。「デ」は

又、「ソナゴアンド」(さうでせうけれど)の如く、「チ」ともなる。

(2) 確定の條件を示す場合

○ ワゼ、サミデ、火ヲモツケ。|| (大變、寒いから、火を持って来い。)

○ オマツチャンシ、イッキ、キモンデ。|| (お待ちなさい、直ぐ来ますから。)

この場合は、活用語の終止形に連なる。

(3) 比較的軽さを舉げて、重さを類推せしむる場合

○假名ワ、オイデ_ンキ、カツガナル。〓〔假名は、おれでも、書ける。〕

○霧島ワ、鹿兒島カイデ_ン、見ユル。〓〔霧島は鹿兒島が、ちでも見える。〕

の如く、この場合は、必ず「_ンニカ_ニカ」の添ふ習ひなり。「_ンデ_ンカ」は、更に、「_ンチャイカ」ともなる。

(二)「ト」 指定の語にて、左の三つの場合に用ふ。

(1) 事物を列挙する場合

○セゴ_ドント、ツゴ_ドント、セシ_ロド_ンガ、キヤツタ。〓〔西郷さんと、東郷さんと、税所さんが、來なかつた。〕

(2) 標準を示す場合。活用語には、終止形に連なる。

○櫻島ガ、ボヤツト、見エタド。〓〔櫻島が、ぼつと見えたぞ。〕

○センシヤツト、ハラカキモンド。〓〔そなたにしてなまを、ど、怒りますぞ。〕

之に、「_ン」の添ふ時は、「_ウント_ン、_スント_ン、_イワン」〓〔何でも、彼(の)の如く、反對の標準を示す。〕

又、「_云」の添ふ時は、「_ワタヤ、_村林チ、_ヤッゴアス」〓〔私は、村林(と)の如く、約まりて「_チ」_」となるを常とす。〕

〓の如く、約まりて「_チ」_」となるを常とす。

(3) 名詞の代りとなる場合

○ガラスノ、シテトガ、オッモンド。〓〔鳥の白いのが、居りますぞ。〕

○ゲノカラ、モッキマトガ、ヨカ。〓〔五位野から、持つて來たのがよい。〕

活用語には、終止形に連なる。「ト」が、「_ツ」_」となることあり。この「ト」は、「_二」にあげたる「ノ」の轉化なるべし。

◎ 單 語 論

(一)「ド」 これは、左の三つの場合に用ふ。

(1)「ツ」の如く指定する場合

○カイガエニヤ、ナイモネド。|| おれの家には、何にもないぞ。

○コントワ、ケツサツタデ、ウツスツド。|| この物は、腐つたから、捨てるぞ。

(2)「ダラウ」の如く推量をわらはず場合

○コケニヤ、ヨカソツガ、アツドガ。|| ここには、真い焼酎があるだろうが。

○コンアメニヤ、ダイデン、コマツド。|| この雨には、誰でも困るだろう。

(3)確定の逆接条件をわらはず場合。但し、この場合は、必ず「ン」「ンカ」「ンカラ」「ンカラ

ン」「ンカラバ」を添ふ。

○イマ、イタドン、ツスヂヤツタ。|| 今行つたけれど、も、留守だった。

○テンキヤ、ヨカドンカ、イチメ。|| 天気は好いけれど、私も、行くまい。

○ソチゴアンドンカラ(ドンカラバ)、ワタヤ、スツモハン。|| さうでせうけれども、私は好きません。

右の如く、活用語の終止形に連なる。但し、(3)の場合は未來形にも連る。

又、(3)の場合は、「見タイドン」「ヨカイドン」「讀モイドン」の如く、「ド」の上に「イ」の添ふとあり。

(一)「ヨイ」「ヨッカ」 比較を示す詞にて、活用語には、終止形に連なる。

○ソメンガ、ナンヨッカ、ソモゴアング。|| 素麺が、何より旨いです。

○ナツア、ミツガ、ナンヨイゴチソヂヤ。|| 夏は、水が、何より御馳走だ。

○見ッヨッカ、キンホガ、ヨカ。|| 見るよりも、聞くがよい。

(二)「カラ」「カイ」 共に、出發を示す語なり。

◎ 單 語 論

○ソイカラ、アスコセン、イッモシマ。〇〔それから、あそこへ、行きました。〕
○ミツア、山ン中カイ、ツル。〇〔水は、山の中から出る。〕

意義轉じて、「舟カラ、イコ」。〔舟で行かう。〕の如く、差別を示すことあり。

一五「ツイ」・「マツ」 共に、到着点を示す詞なり。

○タンヤマツイ、イッモツヤ。〇〔谷山まで、行きませうや。〕

○イッマツイコキヤコアハンカ。〇〔磯まで、行かうでは、ありませんや。〕

「ツイ」は、「ツリ」となることあり。「マツ」に、「マ」の添ふ時は、「マキヤ」である。

一六「ギイ」 限度を示す語なり。

○モウ、コイギイデ、ヤムル。〇〔もう、これぎりやめる。〕

「ギイ」に、「ワ」の續く時は、「ギヤ」となる。

一七「ハッカイ」・「ハカッチャ」 唯一をあらはす詞なり。

○キニ、デランモナ、オイハッカイヂヤ。〇〔今日、出ないものは、おれば、ワリだ。〕

○コシコハカッチャ、ナカ。〇〔これだけ、かゝる。〕

轉じて、「三ツハッカイアル」。〔三升ばかりある。〕の如く、大略を示すことあり。

「ハカッチャ」は、「ハッチャ」ともなる。

活用語には、終止形に連なる。

一八「メ」 否定推量を示す。「マイ」の轉化なり。

○コン天氣ニヤ、シッモナ、アツメ。〇〔この天氣には、來る者は、あるまい。〕

○キユワ、メンナサアモ、オチヤスメ。〇〔今日は、旦那様も、おいでなざるやうや。〕

動詞・活助詞の終止形に連なる。

(一九)「カ」「カイ」疑問の語にて、活用語の終止形に連なる。

○ナイカ、ゴユ、ゴアスカ。〔何か、御用です。〕

○イマカラ、ドケ、イッモンカイ。〔今から、何所にいきます。〕

「カイ」は、「アツケ」(あるかい)の如く、「ケ」なることあり。

(二〇)「ヤ」活用語には、終止形、又は、未來形に添ひて、疑問、又は、呼びかけを示す。

(1)疑問を示す場合

○カナビレダレワ、アンサンヤ。〔金盃は、ありませぬか。〕

○ソケ、サシゲダガ、アンスヤ。〔そこに、足駄が、あります。〕

(2)呼びかけとなる場合

○キユワ、アスツケ、イコヤ。〔今日は、遊びに行かうよ。〕

○ヒガ、クルツデ、モウカエンソヤ。〔日が暮れるから、もう、歸りませうよ。〕

この場合の「ヤ」は、「イコイ」(行かうよ)の如く、「イ」となることあり。

(二一)「ナ」左の四つの場合に用ふ。活用語には、終止形に連なる。

(1)疑問を示す場合

○コンボシヤ、ドシコナ。〔この帽子は、何程か。〕

○ユケニヤ、ソツシヤ、ナカナ。〔ここには、葉子は、ない。〕

(2)禁止をあらはす場合

○モツ、オカメヤツタモスナ。〔もう、お機ひ下さるな。〕

○イタカデ、セン、オスクツナ。〔痛いから、そんなに、押付けるな。〕

(3)容態を指定する場合

◎單語論

○キレナハナ。|| 奇麗な花。 チツナシト。|| 利巧な人。

(4) 感動をあらはす場合

○ヨカ天気ヤ、ゴアハンカナ。|| 「好い天気では、ありませんかね。」

この「ナ」は、「マツチョツテネ」(待つて居るからね)の如く、「ネ」となることあり。この場合は、一等粗

末なり。

(三)「ナラ」 假定の条件をあらはす語にて、活用語には、終止形に連なる。

○オイデヨカナラ、イッキ、クッガ。|| 「おれで可いなら、直ぐ来る。」

○コツカラナラ、ヤマガミエ。|| 「ここからならば山が見えよう。」

(三)「ナガラ」 動詞・活助詞の名詞形に連なりて、「その儘」の意をあらはす語なり。

○オヤ、ヨッコロビナガラ、ヨモ。|| 「おれは、寝ながら、読まう。」

(二)「ヤラ」 事物を列挙するに用ふ。

○カンヤラ、スンヤラ、フデヤラ、モロタ。|| 「紙や、墨や、筆を買った。」

(二)「クサ」 指定の語にて、「こそは」の略なり。

○キヌクサ、シロンヤメ、ノボロ。|| 「今日こそは、城山に登らう。」

○ユクサ、オヂヤシタ。|| 「ようこそ、おいでなさいました。」

静詞には、副詞形に連なる。

(二)「セカ」 比較的軽さを舉げて、重さを益々重く感ぜしむる詞にて、「さへ」の略なり。

○インセカ、オンノ、シツチャル。|| 「大きへ、恩を知つて居る。」

(二)「ダツレ」 「がてら」の轉化にて、「旁」の意を示す。

○散歩ダツレ、花見ケ、イユ。|| 「散歩がてら、花見に行かう。」

◎單語論

(二八)「ハシ」 疑ふ詞にて、「でも」に似たり。

○ワイモ、ユレナ、ミハシシタカ。|| お前も、幽霊を、見でもした。

○ヨカハシノゴツ、セン、スツナ。|| よくでもあるやうに、そんなにするな。

活用語には、終止形、又は、名詞形に連なる。

(二九)「ガタ」「マチ」「ドモ」「ドン」「ナンド」 共に、複数をあらはす。「ガタ」「マチ」は、人倫

のみに用ひ、その他は、一般事物にも用ふ。委しくは、指詞の條を見よ。

(三〇)「ゲナ」 推量の詞にて、活用語には、終止形に連なる。

○試験ナ、アシタカイ、ハシマルゲナ。|| 試験は、明日から始まるぞうな。

○コイガ、イッチ、ヨカゲナ。|| これが、一番良いさうな。

(三一)「モ」「オ」 共に、感動の語なり。

○ナイガモ(オ)。|| なあに、そんなことはなし。

第七章 感 詞

感動せる時、發する聲を、感詞といふ。

感詞は獨立して、文の組織に入らず。これ、この語の、他の語に異なる点なり。左に、その主なるものを擧ぐ。

「アア」(一般感)、「アラヨウ」(驚き)、「オヨウ」(驚き)、「ハラ」(驚き)、「イラ」(驚き)、「エイラ」(驚き)、「ウンダモウ」(驚き)、「イシタヨウ」(驚き)、「イシシキイ」(汚物冷物に觸れ)、「オイ」(呼び)、「ヨウ」(驚き)、「ウ」(驚き)、「インニ」(驚き)、「ハイ」(驚き)、「エハ」(驚き)、「エエ」(賛同)、「イヤ」(イヤ)、「イヤ」(イヤ)、「ンニヤ」(驚き)、「ウンニヤ」(驚き)、「インニヤ」(否定)、「イイ」(悲憤)、「サア」(語起)、「エイヨ」(奮起)、「エッ」(自暴)、「ヤイヤ」(落膽)、「コオ」(驚き)、「イイ」(驚き)、「サア」(語起)、「エイヨ」(奮起)、「エッ」(自暴)、「ヤイヤ」(落膽)、「コオ」(驚き)

ト(思案)の解、アンネ、アンナ(語)

文章論

第一章 複合語及文

「高山」、「白馬」、「山櫻花」、「アイガテ」(有)、「タツツクル」(焚付)の如く、二個以上の主要詞結合して、上の語が、下の語義を限定するを熟語といひ、「勝負」、「草木」、「上下」、「東西南北」の如く、對等の價值を有する二個以上の主要詞が、單に重疊せるを重語といひ、「トツトツ」(時々)、「ナイ」(何々)、「タツ」(度々)、「村々」の如く、同一の主要詞の、繰返さるる

を疊語といひ、「山が」、「マケナラ」(高い)、「イッモンカイ」(行きま)の如く、主要詞に、動詞の添へるを連語といひ、熟語・重語・疊語・連語を總稱して、複合語といふ。單語論に於ては

單語を單位とせるが、文章論に於ては、單語、又は、複合語が單位となる。

複合語は、如何に長く連続すとも、完結せる思想をあらはすことなし。然るに、

インガ、ネチャロ。|| (大が、寝て居る) ヤマワ、タケ。|| (山は、高い)

などいふ時は、その思想や、完結せり。此の如く、完結せる思想を表はすために、適當に

排列せる語の一團を、文、又は、文章と名付く。

第二章 文の成分

第一節 主要成分

(一)主語と述語

インガ、ネチヨル。

ヤマワ、タケ。

右の文は、各、二つの部分より成る。即ち、『インガ』『ヤマワ』は、題目にして、『ネチヨル』『タケ』は、その説明なり。題目たる語を主語といひ、説明の語を述語といふ。

(二)文主

チキ人ナ、色ガ、クレ。

琉球人は、色が黒い。

鹿兒島ワ、人ガ、ウカ。

鹿兒島は、人が多い。

この文の、『クレ』『ウカ』は、共に述語にして、『クレ』の主語は『色ガ』にして、『ウカ』の主語は『人ガ』なり。

故に、『色、ガクレ』『人ガ、ウカ』は、各一個の文なり。然るに、更に、その上に、『チキ人ナ』『鹿兒島ワ』といふ主語あり。かかる主語を、文主といふ。

(三)客語

337355

文には、主語・述語のみより成るもわれど、述語の性質により、更に、他の語を要するものあり。

オヤ、メシ、シタ。

僕は、飯を食つた。

ワヤ、サケチ、ノメ。

君は、酒を飲め。

の如く、他動詞が述語たる時は、『メシ』『サケチ』の如き、目的を要し、

オイモ、アイカラ、タタカレタ。

おれも、彼れに打たれた。

の如く、述語が所相なる時は、『アイカラ』の如き、發動者を要し、

オヤ、ネケ、ネズシチ、ウワセタ。

おれは、猫に鼠を追はせた。

の如く、述語の役相なる時は、『ネケ』の如き、被役者を要し、

キイシマワ、サンラジマヨッカ、タケ。

霧島は、櫻島よりも、高い。

の如く、述語が比較をあらはす時は、『櫻島ヨッカ』の如き、比較の標準を要す。他動の目

的・所相の發動者・役相の被役者・比較の標準を示す語を、客語といふ。主語・述語・文主・客語は、文の成立に缺くべからざる成分なるが故に、主要成分といふ。而して、主語・文主・客語は、体言、又は、体言と助詞との連語なるを普通とし、述語は、用言、又は、用言と助詞との連語なるを普通とす。

第二節 限定語

主要成分、又は、他の限定語を限定して、文義を精密・詳細ならしむる語を、限定語といひ、之を別つて、限体語・限用語の二種とす。

(一) 限体語

主語 述語
フトカ インガ、ネチヨル。○
〔大きな犬が、
寝て居る。〕

主語 客語 述語
オヤ、ヌツカメシ、クタ。○
〔おれは、暖い
飯を食つた。〕

主語 客語 述語
オヤ、キレナネケ、キサナカネズチ、ウワセタ。○
〔僕は、奇麗な猫に、
汚い息を遣はせた。〕

右の「フトカ」「ヌツカ」「キレナ」「キサナカ」の如く、体言の成分を限定する語を、限体語といふ。体言と助詞との連語も、限体語となるが、活用語の限体語となるには、終止形よりす。

(二) 限用語

限体語 主語 述語
フトカ インガ、コケ、ネチヨル。○
〔大きな犬が、ここ
に、寝て居る。〕

主語 限体語 客語 述語
オヤ、イッチ、ヌツカメシ、三、クタ。○
〔おれは、一番暖い
飯を、三杯食つた。〕

右の、『コケ』『イッナ』『三べ』の如く、用言の成分を限定するを、限定語といふ。限定語と副詞とは、異名同物なり。

第三章 成分の位置

主語 述語
 ハナガ、セチヨル。〓〔花が、咲いて居る。〕

限定語 主語 限定語 述語
 ヨカハナン、ニツ、セチヨル。〓〔よい花が、二ツ咲いて居る。〕

主語 限定語 客語 限定語 述語
 ネコガ、コマンチカネズンヲ、イマ、コダ。〓〔猫が、小さい鼠を、今咬んだ。〕

限定語 文主 限定語 主語 限定語 述語
 アンチキ人ナ、カラダン色ガ、ワゼクレ。〓〔彼の琉球人は、林の色が大變黒い。〕

右の如く、主語は上に、述語は下に、客語はその間に、文主は主語の上に、限定語は被限

定語の上にあるを、普通とす。然るに、文中、最も重要な語を、先にいはんがために、その順序を顛倒することあり。左に、その例を擧ぐ。

述語 主語
 ナイカ、ソヤ。〓〔それは、何か。〕

限定語 述語 主語
 ドケ、オツタカ、ワヤ。〓〔お前は、何處に居つたか。〕

述語 主語
 ウメドカイ、カチキマンツワ。〓〔加治木饅頭は、旨いだらうか。〕

述語 限定語 限定語
 オマツチャンシ、イッキキモンデ。〓〔直ぐ來ますから、お待ちなさい。〕

客語 主語 述語
 キモンノ、オマイモ、キヤイ。〓〔お前も、着物を着なさい。〕

限定語 主語 述語
 チットン、ホコイガ、タチモハンナ。〓〔埃が、ちまかせ。〕

第四章 成分の省略

前後の関係により、時の事情により、いはすとも明かなる場合は、成分を省く。而して最も多きは、主語の省略なり。

(ワタシヤ)ハシメチ、オ目イカカス。〇〔始めて、お目に、かかります。〕

(ワヤ)イママツ、ナンシチヨッタカ。〇〔今まで、何をして居たか。〕

(オマンサアワ)ミンナセエ、ヨシエ、ギヤッタモシ。〇〔皆様に、宜敷おっしゃつて下さい。〕

(キユワ)ヨカテンキ、ゴアス。〇〔好い天氣です。〕

(ダイモ)ユケニヤ、イッナ。〇〔こゝには、入るな。〕

などは、主語を省ける例にて、

ワタシヤ、オマンサアン、ヨカトコイ。〇〔私は、あなたの好きな所に。〕

オヤ、チャチ、(ノヂ)アヤ、サキヨノダ。〇〔おれは茶を、彼は酒を飲んだ。〕

オヤ、メシエ、クガ、ワヤ、(メシ)ニクワンカ。〇〔おれは、飯を食ふが、お前は、食はないか。〕

ミツノ、ノンタカモナ、(ミツ)チノメ。〇〔水の飲みたいものは、飲め。〕

などは、客語・述語を省ける例なり。

コヤ、イッチン、ヨカ品(デ)、ゴアス。〇〔これは、一番、良い品です。〕

ネワ、ドシコ(デ)、ゴサスカ。〇〔價は、何程ですか。〕

コヤ、二十錢(デ)、ゴザイモス。〇〔これは、二十錢です。〕

上村サンナ、ウチ(ニ)、オチヤスカ。〇〔上村さんは、宅においでです。〕

オマンサアワ、ネビゴアスカ。〇〔あなたは、眠くございます。〕

ハマン、ヒロシ(テ)、マケン、ヒキ○〔幅が廣くして、長けり低し。〕

ソウカ(モ)、シレモハンナ○〔さうかも、知れませんね。〕

アンシヤ、ダイサア(ヂヤット)ナ○〔彼の人は、誰れか。〕

スツバイテ、ドシヨ(ニナル)ナ○〔總てで、何程になるか。〕

ユントケワ、ドシヨ(スル)ナ○〔この時計は、何程か。〕

などは、一部分の省略例なり。「ゴザス」「ゴアス」「ゴザイモス」の上なる「ヤ」、語末「イ」韻の語の下に添ふ「ヒ」「イ」、語末「ア」韻の語の下に附く「ワ」、靜詞の副詞形に續く「シ」に添ふ「テ」は、殆ど用ふるることなし。

オヤットサア、御苦勞様、ゴシロサア、御苦勞様、

ソイナラ、左様なら、ギャル、〔さうだ、〕

チャロ、〔さうだらう〕 アイガト、〔有り難う、〕

ナイガオマンサア、〔どう致しまして、〕

の如く、非常に省略せられて、感詞の如くなれるもあり。

第五章 句

主要成分備はりて、而かも、その意義、完結せざるものを句といふ。之を大別して、獨立

句・附屬句の二種とす。

第一節 獨立句

主語 述語 主語 述語
ヤマワ、タコシ、ツミヤ、フケ○〔山は高くして、海は深い。〕

主語 述語 主語 述語 主語 述語
ノミヤ、シレ、カワ、シレ、オメワ、シル。〓
〔蠶は食ひ、蚊は食ひ、妻は狂ふ。〕

右の「ヤマワタコシ」・「ノミヤシレ」・「カワシレ」の如く、下なる文と對等の價値を有する句を獨立句といふ。而して、一個以上の獨立句を含む文を、重文といふ。

第二節 附屬句

一つの文に、附屬せる句を附屬句といふ。之を分つて、原因句・條件句・限体句の三種とす。

(一)原因句 文の原因を示す句なり。

主語 述語 主語 述語
アメガ、フツテ、チガ、カタマッタ。〓
〔雨が降つて、地が固まった。〕

右の「アメガフツテ」・「カゼワフカチ」は、原因句なり。

(二)條件句 假定・確定の條件をあらはす句を、條件句といふ。

主語 述語 主語 述語
ワイガ、イケバ、オイモ、イク。〓
〔君が行けば、僕も行く。〕

主語 述語 主語 述語
ソイガ、ンメナラ、コイモ、ンマカロ。〓
〔それが旨いならば、これも旨い。〕

主語 述語 主語 述語
ナツア、アツゴアレテ、人ガ、ダレモス。〓
〔夏は、暑くたしますから、人が渡れます。〕

主語 述語 主語 述語
ピンタガ、イタカドン、オヤ、キハツチヨル。〓
〔頭が痛いけれども、僕は我慢して居る。〕

右の例の上半は、皆條件句なり。

(三)限体句 体言を限定する句を、限体句といふ。

主語 述語 主語 述語
ユツノ、フツトキヤ、サミモンチヤ。〓
〔雪の降る時は、寒いものだ。〕

主語 述語 客語 述語
オヤ、色ン、シレ人ヲ、ミタ○おれは、色の黒い人を見た。

右の「ユッノフツ」、「色ンシレ」は、限体句なり。

主語 述語
キッネン、シテトガ、オル○狐の白いのが、居る。

主語 述語
ワヤ、花ンサカントチ、モツチヨルカ○お前は、花の咲かんのを、持つて居るか。

の如く、限体句の下なる体言の代りに、助詞「ト」を用ふることあり。
一個以上の附屬句を含む文を、複文といふ。

第六章 附屬文

主語 述語 主語 限用語 述語
「ワイモケ」チュタヤ、アイガ、「オヤキヨワコン」チュタ○お前も、来いといつたら、彼れが、おれは今日は来んといつた。

の如く、一つの文が、より大なる文の一部分となれるを、附屬文、又は、挿入文といふ。
一個以上の附屬文を含む文も、亦、複文といふ。

重文・複文に對し、「花ンセタ」花が咲いた、「蚊ガキタ」蚊が来たの如く、主語と述語との關係、一回成立するを、單文といふ。「ヂキ人ナ色ガシレ」琉球人は色が黒いの如く、文主を有するものも、單文と見做す。

第七章 接續語

句、又は、文を連結する詞を、接續語といふ。接續語に、左の三種あり。

(一)累加の接續語

オヤ、鹿兒島カイ、伊敷マツ、馬車イ、ノッタ○ソシテ、ノイ賃ノ、三錢ヤッタ○おれは、鹿兒島から、伊敷まで馬車に乗った。而して、乗り賃を、三錢やった。

ケサ、五時、オキタ○ソイカラ、ツラアルタイ、メシユクタイシチ、ガツケイマトキヤ、ガツツイ

七時チヤッタ○今朝、五時に起きた。それから、顔を洗つたり、飯を食つたりして、學校に着いた時は、丁度、七時であつた。

(二) 順接の接続語

キユワ、櫻シメ、ユツガ積ンヂョル○ソイデ、コゲンサンカト○今日は、櫻島に、雪が積んで居る。それで、こんなに寒いのだ。

ワタヤ、伊集院ヅイ、インモシタ○シタヤ、アツゼ、ダレモシタ○私は、伊集院まで、行きました。所が、大變、疲れました。

オマヤ、イキヤラントナ○ソイナラ、ヅスバンノ、シチクイヤイ○お前は、行きなさらんか。それならば、留守番をして呉れなさい。

この外、「ソイヂヤ」(それ)、「ソイヂヤツテ」(それだ)、「ソウスイット」(さらす)、「ツキモシチヤ」(就きまは)

などあり。

(三) 逆接の接続語

コツカラ、チカ路ガゴアス○ソチゴアンドン、ワゼ、ミチガワルゴアンド○ここから、近路が、ありませう。けれど

も、大變、路が悪うございませう。

ワイノユゴツ、ユンツツア、ヨカ品ヂヤツ○ソイドンカラ、ネガ、アンマイ、タケ○お前の、

この靴は、良い品だ。けれど、値段が餘り高い。

この外、「ソイトン」(併し)などあり。
「ドシカラン」(併し)などあり。

文語、又は、普通語には、「或は」○「若くは」○「又は」○「それとも」の如く、選擇を示す接続語

おれど、鹿兒島語にはなし。

第八章 孤立語

感詞、及、呼びかけの語は、文の組織に入らざるを以て、孤立語と名付く。

オイ。メロウ。シンブンナ、ネカ。〓おい、姉さん、新聞はないか。

ハイ。大阪ントモ、鹿兒島ントモ、ゴザス。〓はい。大阪のも、鹿兒島のも、あります。

オッカサン。ワタヤ、ゴッケンウカダ、メシメ。〓お母様。私は、御機嫌伺に参りました。

アラヨウ。ハッセドノン、キヤッタ。〓おやまあ。八左衛門さんの、來なごつた。

ヤイヤ。オヤ、スツパイ、マッゴタ。〓やあ、僕は、悉皆間違つた。

ハラ。イケン、シヤッタトナ。〓あち、どうなりましたのですか。

など、皆孤立語の例なり。

鹿兒島語法終

◎附 録

附 録

薩摩狂句

水車屋ん娘を貰ろたや聲が高け
嫌々は醜様がたん癖ぢやがな
下女が戀下男の辨當を澤山詰め
田舎娘手足の太てとがらつと瑕
姑が死んで嫁御は蔭で笑れ
ハツクシモン誰か己がこつ譽めたこら

禿頭狂句の會ぢやもてがよか
女房ど愚は新かが宜つさんさ
放蕩者家土藏ひん飲ぢ親泣かせ
お前どなら手鍋提げてん宜つさんさ
神官様も盆にや團子食ち冷素麵
精一杯昨夜飲だや今日は疲れた
禿頭摘ん代小言が多で高こはな
祖母さん團扇を背負ち朝顔見
君達や親の胃散で腑が良かと
喘息は何時でん咽喉が淨瑠璃節

◎附 録
 妻君つまを持もとどつあつどん言いはならん
 借しゃ錢せんも負かち逃にぐれば輕かりもんぢや
 留り守まちやつで狂き句くをを一ひつ書ひつ見み哉か

附 録 終

◎訂正増補
 版三鹿兒島語ト普通語
 附會話

全一册
 郵正 稅價 金 貳拾 錢

◎鶴陽蒲生清隆編輯
 ますらをの友

第一編	第二編	第三編	第四編	第五編	全五册
正價	正價	正價	正價	正價	
拾五錢	拾五錢	拾五錢	拾五錢	拾五錢	
郵稅	郵稅	郵稅	郵稅	郵稅	
貳錢	貳錢	貳錢	貳錢	貳錢	
金	金	金	金	金	
英傑	英傑	英傑	英傑	英傑	
の士	の士	の士	の士	の士	

右は薩摩琵琶歌を輯めたるものと談笑するの感あらしむ

◎神崎陵民著
 手紙の禮法

全一册
 郵正 稅價 金 拾 四 八 錢

明治四十一年十一月十五日印刷
明治四十一年十一月二十日發行

鹿兒島語法

定價金參拾錢

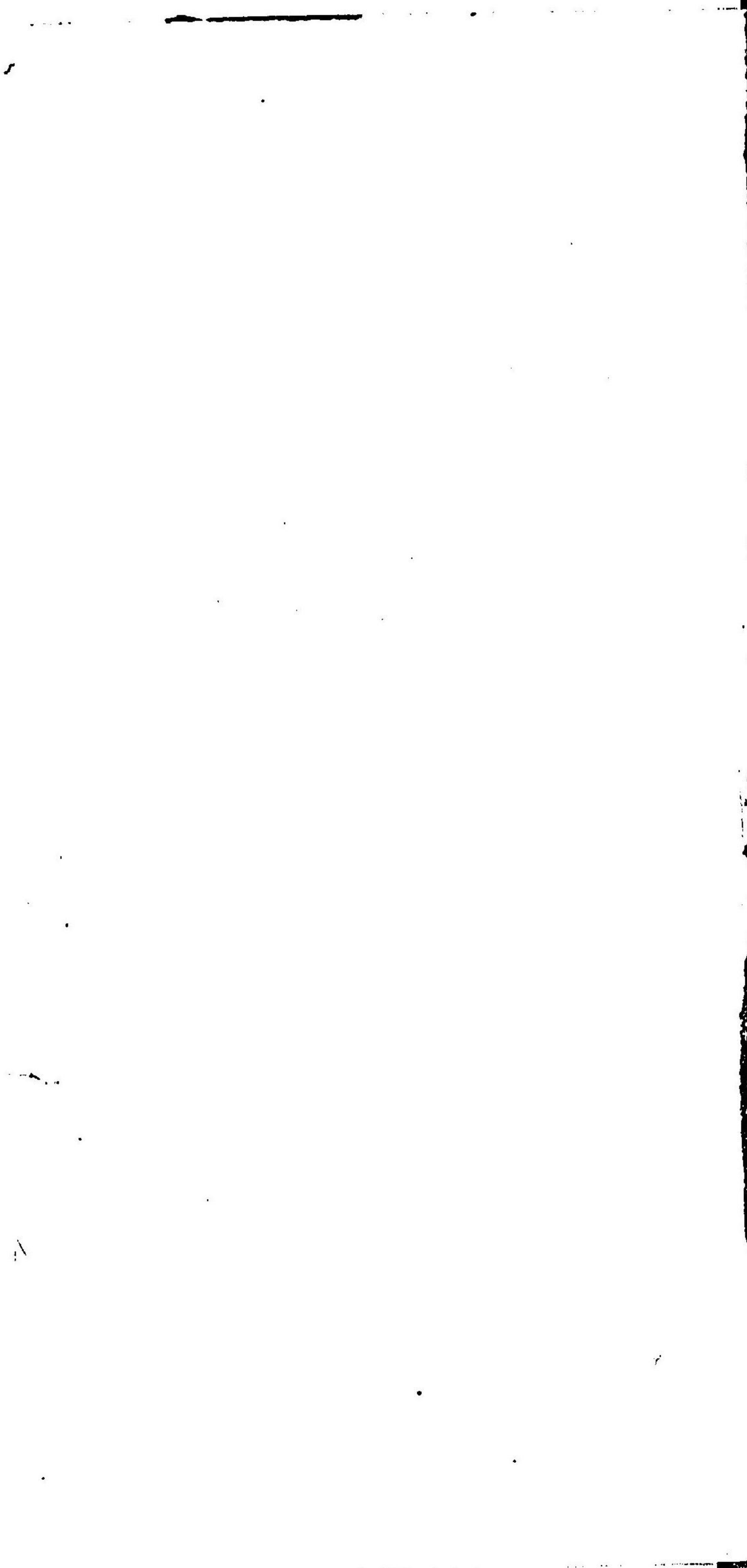
著者 村林孫四郎

發行者兼 鹿兒島市仲町百二十四番地
吉田幸兵衛

印刷所 積善館印刷部
大阪市西區立賣堀南通三丁目三五番邸

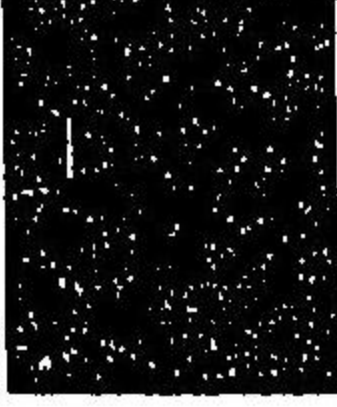
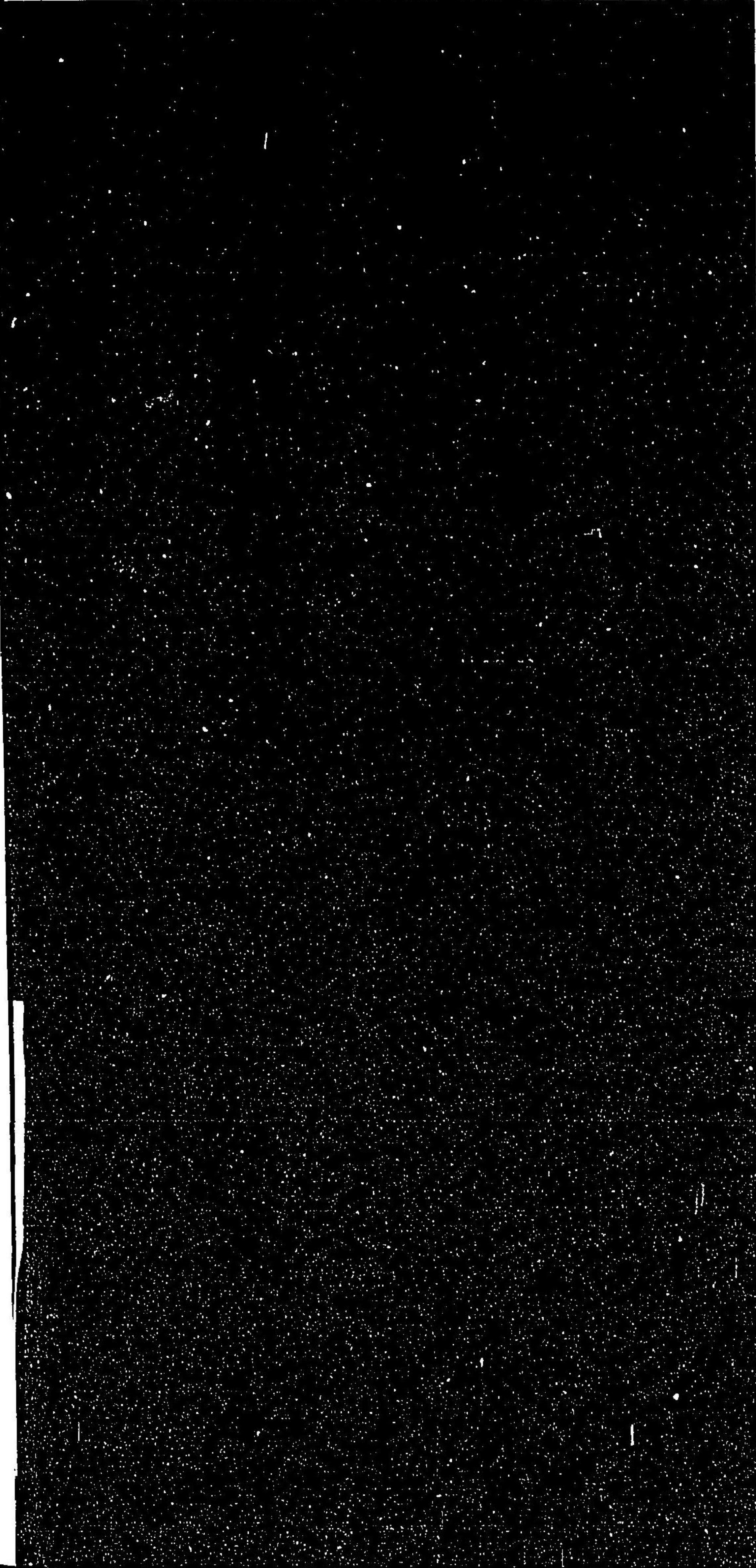


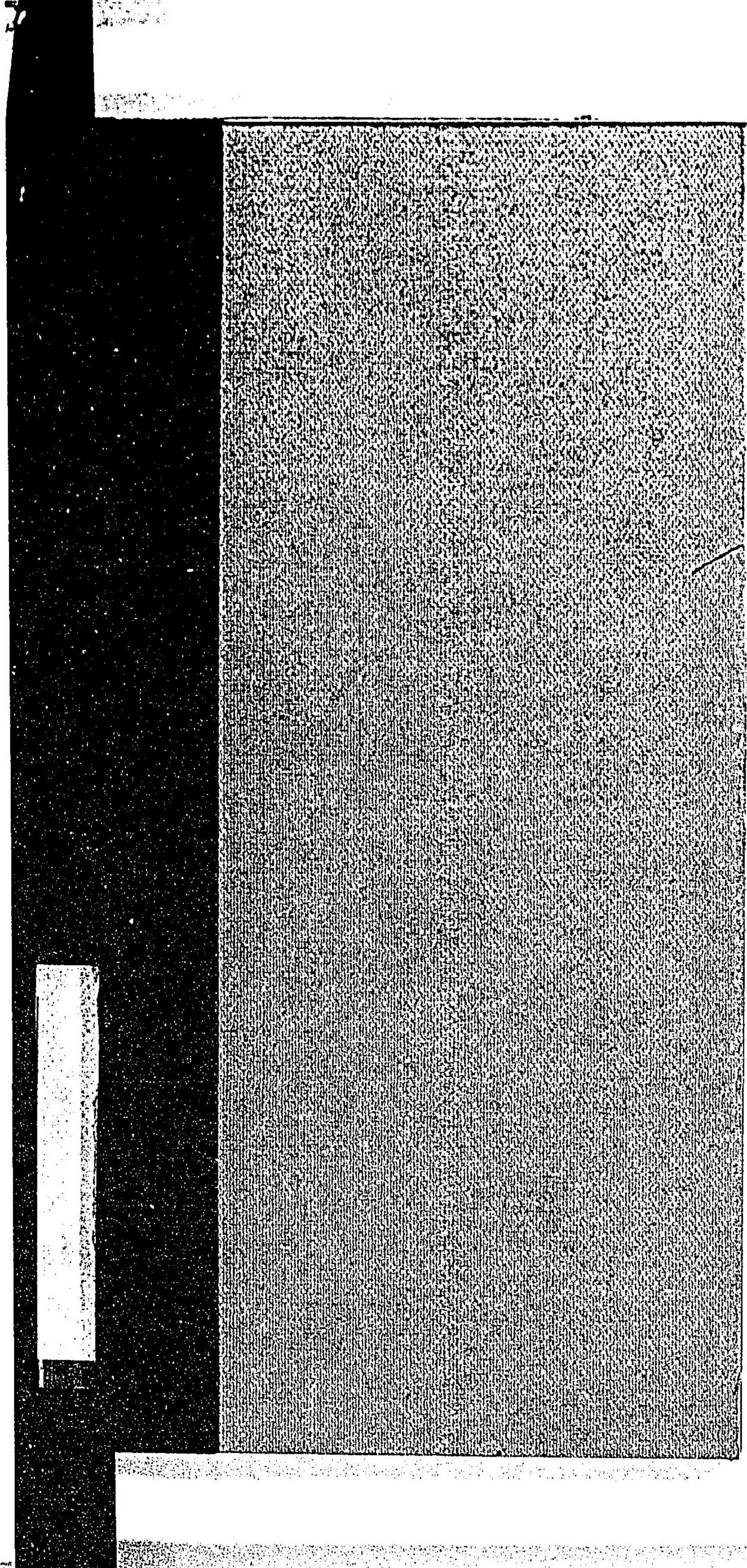
發行所 鹿兒島市仲町
(電話四十四番) 吉田文卉堂



Vertical text on the right side of the page, possibly bleed-through from the reverse side. The text is extremely faint and difficult to read, but appears to be a list or index of items.







818.97
M919k

081966-000-2

818.97-M919k

鹿児島語法

村林 孫四郎/著

M41

DAC-6970



EPB-14

818.9

M.196





.51 P.

2

1